

愛媛大学教育学部

第133号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番

愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com

賀 春

元旦

愛媛大学教育学部同窓会役員一同



卒業生の 心のふるさととして



愛媛大学
教育学部長
小助川元太

新年明けましておめでとうございます。同窓会の皆様におかれましては、日頃から愛媛大学教育学部に多大なご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

以前にも書きましたが、私は学部長になる前に、附属中学校の校長をしていました。その附属中学校の敷地内にある章光堂は、愛媛大学の前身の一つである旧制松山高等学校の講堂として建てられたものですが、今は附属中学校の集会場として、入学式や卒業式を始め、さまざまな行事に使われています。今年二月で竣工から百年を迎える歴史ある建造物は、附属中学校卒業生にとって心のふるさとであり、附属中学校の卒業生は、毎年この章光堂で成人式を行っています。

ところで、この章光堂は附属中学校の卒業生だけではなく、旧制松山高等学校（松高）卒業生に

とつての心のふるさとでもあります。松高といえば、一九八八年公開の映画で、山田洋次監督『ダウン・ヒローズ』という作品をご存じでしょうか。同名の早坂暁氏の自伝的小説が原作で、松高の学生たちの青春を描いた作品です。実は、今から三年前の二〇一九年三月三十一日に、松高の百周年記念大会が松高OBの方々によって開催され、当時附属中学校の校長だった私も招待していただきました。そこでは、早坂氏と同級だったという卒業生の方々とお話する機会があったのですが、早坂氏はその二年前の二〇一七年に八十八歳で亡くなっていますので、その同級生の方はそのときすでに九十歳ぐらいでいらつしたはずなんです。このように、会場には八十代から九十代のかつての松高生たちが集まったのですが、彼らが肩を組んで松高の寮歌を誇らしげに歌っていらつした姿が印象的でした。松高そのものは昭和二十五年（一九五〇）に廃校となり、現在の愛媛大学法文学部・理学部へと引き継がれることになりましたが、そこで青春を過ごした人たちのなかで、松高は永遠に生き続けているのだということを実感しました。また、私がご挨拶の中で、松高の精神が附属中学校にも受け継がれているという話をさせていた

だいたところ、卒業生のみならずは大変喜んでくださいました。話は変わりますが、先日、たまに教育学部の卒業生の方々お話しをする機会がありました。そこで、同じ教育学部の卒業生であっても、世代によって在学中の学部編成やコース・専攻（専修）が異なっているという話になりました。このように、多くの同窓生のみなさんから見ると、今の教育学部は在籍されていたころとは大きく変わっているはずなんです。中には、在学時に所属していたらつした課程やコースそのものがなくなつてしまった方も大勢いらつしたと思います。とくにそこで学ばれたことが今の自分に繋がっている方、生きる支えになっていたりする方にとっては、とても残念で寂しいことだと思います。

ただ、先の松高の例を挙げるまでもなく、どんな学校でも、時代の流れによって変化を余儀なくされます。大切なのは、たとえ形は変わっても、そこにつながることができるものとして残っていること、そして、その精神が後の世代に受け継がれていくことではないかと思っています。

愛媛大学教育学部は、今、大きな節目を迎えています。すでに第三期中期目標期間が始まった二〇一六年に学部が教員養成に特化した形に改組され、一九九三年に設置された大学院教育学研究科も、二〇二〇年には教育実践高度化専攻（教職大学院）と心理発達臨床専攻の二専攻となりました。ところが、これで組織改編は終わりとはいふことにはなりそうにありません。というのも、社会情勢や国の方針、そして大学全体の動きの中で、愛媛大学教育学部が今後ともこれまでどおり教員養成機能を維持しつつ、地域の教育学部としての役割を果たすためには、新た

な手を打たなければ立ち行かなくなるのが目に見えているからです。

具体的には、二〇一六年度から始まった第三期中期目標期間中にポイント制が導入されたことにより、この六年間で学部教員の数が二割も減りました。これから先、教員の数が減ることはあっても、もとの状態に戻るようなことは期待できませんので、限られたスタッフでいかに教育を充実させていくかということを考えなければなりません。さらに、令和三年度に入り、中教審から『令和の日本型学校教育』を担う教員の養成や採用、研修についての改革の方針が次々と示されています。そうした国の方針や社会の動向を踏まえながら、教員養成・研修機関としての責任を果たしていくためには、カリキュラムや学生の指導体制をさらに見直していく必要があります。

幸いにして、歴代の学部長を中心とした先生方の努力により、県内の教育界との協力関係が深まったことで、教職大学院の運営や附属学校園との連携がうまく行き、また、教員養成・研修にかかる県や市町の教育委員会との連携も進んでいます。また、数は少なくなつたものの、実力ある優秀な教員も揃っています。大袈裟な話ではなく、中四国の教育学部の中でも、わが愛媛大学教育学部はかなりアドバンテージが高い方だと自負しています。こうした恵まれた環境を生かしながら、卒業生の心のふるさととして、みなさんに誇りを感じていただけるような教育学部にするために、教職員一同、力を合わせて頑張ろうと思います。今後とも同窓会の皆様のご理解とご協力を賜れば幸いです。

表紙

「夢」……………宮田 武史

題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫

「卒業生の心のふるさととして」…(1)

愛媛大学教育学部長 小助川元太

心 響……………(2)

「母校に勤めて」

鬼北町・愛治小学校長

古谷 孝

研究室紹介……………(3)

教育学部音楽教育研究室

楠 俊明 研究室

職場だより……………(5)

一年間を大切に

四国中央市・関川小教諭 谷本佳奈穂

共に成長する

松前町・松前中教諭 河野 夏美

出会いに感謝

大洲市・喜多小教諭 土居 恵

今の自分にできること

西予市・野村小教諭 桑谷 大介

「教育する」ということ

松野町・松野中教諭 林 惇

ピンチはチャンス

愛媛大学教育学部附属小教諭 山本 大介

学部トピックス……………(11)

特別支援教育教員養成課程三回生の

加藤史さんが令和三年度鳴門市成人

式において市長賞を受賞しました

・愛媛大学教育学部と四国中央市教育

委員会との連携協力に関する覚書の

調印式を行いました

目次

母校に勤めて

鬼北町立

愛治小学校長

古谷 孝

(昭六〇年卒)

大学を卒業して約一週間後に私は教員としてのスタートを切りました。

幸せなことに、生まれ育った鬼北町(当時は広見町)の隣町に初任者として赴任したため、一応、住宅は借りていましたが、生活自体は自宅から通っているようなものでした。

あれから三十七年がたち、現在、大学の四年間以外、ずっと住み続けた地域で、自分の父母も、祖母も、そして、わが子たちも通った母校である小学校に勤務させていただいています。

私が入学した当時の学校は、人数が二百十九人、一学年に四十人近くがいました。ただ、私たちの学年だけは二十九人の学級でした。木造校舎で、汲み取り式のトイレ、しかも、その汲み取りを子どもたちが掃除の時間に行うという、今からは想像もできないスタイルでした。冬は薪ストーブのため、各家庭から薪を一束持つてきて、教室の横に積み上げておき、給食の時間にはストーブの上で、牛乳を温めたり、パンを焼いたりできました。牛乳と言えば、現在の牛乳のような紙パックではなくビン入りの牛乳で、運んでいる途中で、係がつまずいたりすると、割れて

大変なことになりました。

近くには中学校もあって、運動会などは合同で行い、大きなお兄さんたちの行進の迫力に圧倒されました。でも、五年生のころには町内で一つの学校(広見中学校)に統合され、私たちは、新しくきれいな広見中学校に進学しました。

放課後の陸上や水泳の練習はありましたし、音楽会や学芸会もありましたが、休みの日には友だちと、近所の山を走り回ったり、田んぼで野球をしたり、自転車で小路を走って、約二メートルの石垣から落ちたなんてこともありまし



心響

そんな思いでいっぱい小学校にわが子が入学し、参観日、運動会などの各種行事で学校に行くと、何とも言えない、懐かしさを感じたものでした。

そして、昨年度、その母校に赴任しました。もちろん初めての勤務です。これは、今までとは全く違った感覚でした。

四月一日の朝に自宅を出て、学校まで歩きました。小学生のころに歩いた道です。約五百メートルの距離がとても新鮮に見えました。

御存じの通り、学校は四月一日から一気に動き始めます。新しいメンバーでいろいろなことが引き継がれたり、計画が立案されて職員会が行われたりして、ゆつくりと物を考えるようなゆとりはありません。しかし、一日を終えて、ふと運動場を見ると、「あの木は、残っているな。」とか「あの山の風景は変わらないな。」とか、五十年前の記憶がよみがえります。人間の記憶というのは、何かをきっかけに、随分と以前のことでもしつかりと思いつくものだと驚きます。

入学式に校歌を聞けば、当然のごとく歌詞が浮かんできます。子どもたちの話す地域の話題が、ほぼ理解できます。先生たちから聞く、地域でお世話になる方々や、役職にある人たちの名前と顔が分かれます。人と会って、多くの人に声をかけてもらい、学校や地域の情報を話していただきます。

そんな中で、自分の中に眠っていた「郷土愛」のようなものが覚醒してきました。

将来、この地域を支えてくれるであろう大切な子どもたちのために、できるだけのことをしたい。地域と一体となって子どもたちの成長を見守るような体制を創り、子どもたち自身が地域の人を知り、地域の良さを感じ、やがて故郷を大切に思う心を持つてほしい。そのための教育活動を推進して行きたい。

もちろん、今までに赴任した学校でも、常に子どもたちや学校のためにと、全力で仕事に取り組んできたという自負はありますが、自分が思っていた以上に、自分にとって、母校という存在は大きなものだったのかもしれません。

今年度、新型コロナウイルスの影響により、思ったような活動ができない中ですが、学校経営の大きな柱の一つとして「アドリブ力」と「プレゼン力」の育成を設定しました。これは、子どもたちが、これからどんな広い世界へ出て行っても、その時、その場の変化に応じて、自分の力を発揮していきける力を付けてあげたいという願いからです。もちろんそれは、新しい学習指導要領で求められている力とつながります。また、地域のボランティアを今までよりも多く学校の活動に取り入れました。地域の人のつながりを持ち、地域の良さを知ったり、感じたり、故郷を誇れる気持ちを養ったりするためです。

現在私は、「最後まで誠実に、全力を尽くしているか。」と自問自答しながら、日々の活動に取り組みたいと思っています。我が地域、我が母校、そして、大切な「後輩」たちのために。

・教育学部附属特別支援学校創立五十周年記念式典を開催しました

・教育学部附属特別支援学校同窓会「虹の会」が令和三年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞しました

・教育学部でワークショップ「投票に行こう!」を開催しました

教育学部の今..... (14)

学内風景・同窓会花壇

・「人生の指針」

初等教育コース 善家 瑛徳 (15)

・「大学生生活を振り返って」

中等教育コース 古本 夏巳 (16)

表紙によせて..... (15)

先輩を偲ぶ..... (17)

「あしあと(6)」先輩たちのあしあと

同窓会事務局

会員の声..... (19)

・「法然と親鸞 英訳「教行信証」

— Mark L. Blum 博士の序文の続き —

・「松山や」 井手窪 理 (21)

・「社会学のすすめ」 堺 賢治 (23)

同窓会事務局からお願い..... (24)

部活動紹介..... (25)

愛媛大学美術部

放送大学・ミュージアム案内..... (26)

校友会ニュース・会報送付について..... (27)

敬申・寄付者名・叙勲..... (28)

裏表紙..... (29)

会員写真館

文芸欄

研究室紹介

愛媛大学教育学部 音楽教育研究室



准教授 楠 俊明 先生

自己紹介

わたくしは、昭和六十年に愛媛大学教育学部特別教科（音楽）教員養成課程を卒業し、地元八幡浜の中学校教員として、十二年間勤務しました。その後、平成九年から愛媛大学教育学部附属小学校勤務を経て、平成二十八年に愛媛大学教育学部に採用されました。しかしながら、愛媛大学勤務は合唱の非常勤講師として附属小学校時代から始まっていました。平成十四年から採用されるまで毎週金曜日の放課後、小学校の授業終了後急いで大演奏室に足を運んでいました。

大学時代と同じ、教育学部の二号館で働くことになったのです

が、昔とは違って綺麗になっていました。わたくしの研究室はあの永岡先生の部屋となりました。学生時代、五階の廊下や学生研究室でよく遊んだことを思い出しながら、楽しく勤務しています。二号館五階の一番端つこで非常階段に近いので、初めは階段で頑張っていました。最初は、歳をとるごとに三号館のエレベーターを使うようになりました。やはり、歳には勝てません。

昨年、その二号館も改築され、新しい研究室で毎日過ごしています。つまり、二回修復後、三回目の教育学部二号館で過ごしています。愛媛大学教員生活は、今年で六年目を迎えます。

音楽研究員の教員

着任したとき、音楽教室の先生方は、わたくしを除いて六名いらつしやいました。田邊隆先生（音楽科教育）、木村勢津先生（声楽）、井上洋一先生（音楽デザイン）、市川克明先生（器楽）、福富彩子先生（ピアノ）、安積京子先生（ピアノ）です。田邊先生、木村先生はわたくしが大学生のときにお世話になった先生で、懐かしいお話をしながら楽しく勤務させていただきました。残念ながら、田邊先生と木村先生はご退職になり、今は五名で音楽教室を運営しています。もちろん、今のメンバーも楽しく、様々なことを学ばせていただきながら授業に研究に取り組んでいます。

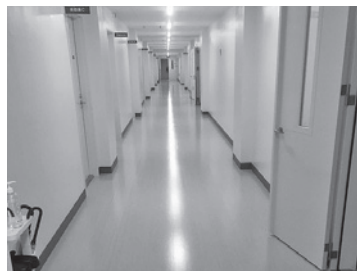
新しくなった音楽教室

前述した、昨年度改築された二号館五階の音楽教室について少し紹介しましょう。教員が減り個人研究室が少なくなった分、学生が音楽を学ぶことのできる教室が増えました。一人一人がキーボードを使いながら学習できるML室、階段状の教室の中演奏室、学生が音楽を互いに学び合うことのできる芸術系ALLR室等、学びを主体

とした教室が増えました。たくさんあったアップライトピアノの個人練習室は二十室になり、その分グランドピアノで練習できる部屋が増えました。先生方の研究室は全てピアノが入り、防音室になりました。五階の音楽教室が懐かしい方はいつでも大学においでください。思い出話を語りながら紹介いたします。



ML教室



新しい2号館5階

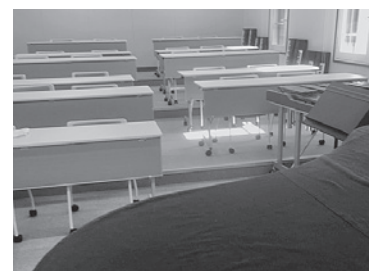
研究内容

愛媛大学に着任する前から、合唱の非常勤講師として授業を行っていましたので、音楽科教育と合唱についての研究を進めています。

音楽科教育では、児童生徒の意見や反応を活かした授業の在り方についての指導法を学生と共に考えています。学習指導要領を学習し、模擬授業を試作させると、教



芸術系ALLR室



中演奏室

師主導の一方的な授業を多くの学生が提案し、理論的に教え込もうと考えてしまいます。児童生徒と共に作る授業にはなかなか到達できていません。これをなんとかしたいと学生に指導しながら共に研究を進めています。

また、各学校で行われている音楽の授業や研究校の授業を参観しても、共通事項ばかりを追及させ、授業の始まりと終わりでそこにある音楽はほとんど変わらないことに疑問を感じています。

一方、児童生徒の意見を活かして授業を作っていくとする活動もよく参観しました。音楽をこうしたいと意見を言い合って音楽の作り方をまとめて、子どもの思いを活かした授業を進めていきます。しかしながら、その後の音楽表現そのものは何も変わらない研究授業なのです。多くの学校がこのパターンで、これが詳細に記されている学習指導要領の読み取り違いかもしれません。

大切なことは、音楽そのものの良さや素晴らしさを体感させることです。音楽を道具に理論を教えるのではなく、理論等を道具に音楽を教えるのです。このことを念頭に置いて、授業作りの研究

を進めていきたいと思っています。

合唱では、コンクールの在り方や取組方についての研究を進めています。NHKコンクールと連盟コンクールの違い、自由曲の選曲の仕方、練習方法等について取材や調査から、今後の展望を考えています。

合唱ミュージカル活動

数年前までは、中等音楽教育の学生も多く、楽友会コンサートが行われていましたので、そこで合唱の授業の発表としてミュージカルを公演していました。しかし、学生が少なくなつて楽友会コンサートはなくなりました。それでも、授業の発表の場として、ミュージカル公演は続けています。学内の南加記念ホール公演を年末に実施し、その後、附属小中学校で学校公演を実施しています。

後期の「合唱」の授業で公演に向けて練習を進めています。ミュージカルと言っても、合唱の授業ですから、合唱のナンバーを増やして、受講者全員が舞台に立つことができるように工夫しています。学生は衣装や大道具小道具、伴奏や照明等を企画しながら、練

習に取り組みます。授業時間外でも自分たちで考えながら、ミュージカルの楽しさが伝わるように頑張っています。

また、教育学部ですので附属校との連携を図るため、小中学生の出演も考えて、土曜学習と関連させながら練習を進めています。子役のある演目を考えたり、小中学生が出演できる演出を考えています。わたくしの企画する土曜学習に学生たちも参加し、子どもと共に歌ったり、子どもに振りを教えたりして歌唱指導の在り方や小中学生の習熟特性を学んでいます。子どもたちは学生から楽しく学び取り、学生自身も教えることのポイントを身に付けています。



学生と子どものダンス練習

さらに、ミュージカル鑑賞を通して音楽の面白さを体感させるために、子どもたちの実施後のアンケートをもとに演出を改善しています。近年では、鑑賞する小中学生と一緒にミュージカルに参加できるように、音楽の先生と連携して会場の全員が歌うシーンを増やしています。また、先生が楽器演奏に参加したり、配役に入ったりして、身近な人が演じることで興味を高めています。「ライオンキング」や「美女と野獣」が子どもたちは大好きですね。今年は難曲の「レ・ミゼラブル」に挑戦しています。革命の学生役が足りないのです、小学校の先生に応援を頼んでいます。



数年前のレ・ミゼラブル公演

最後に

コロナ禍で、歌うことが大変な時期です。わたくしの研究も歌うことを中心に進めていましたので、なかなか思うように進みませんでした。しかし、これから歌えるようになると、その反動として歌える喜びを得得させることのできると思つておきの時期が来ると考えています。皆さまの学校で歌うことの研究を進めたい方は是非ご連絡ください。わたくしの研究と絡めながら、学校の音楽の授業にお邪魔したいと思っています。よろしくお願ひいたします。

kusu.toshaki.mu@elime-u.ac.jp



ライオンキング公演を終えて

職場だより



一年間を大切に



四国中央市
関川小教諭
谷本佳奈穂
(平三〇卒)

四国中央市での教員生活も四年目になりました。愛媛大学を卒業し、関川小学校に赴任すると知った三月末、これから教員生活が始まるという緊張と期待を感じたことを今でも覚えています。

関川小学校は、校区内に関川が流れており、登下校中にサルやヘビが目撃されることもあるなど山に囲まれた自然豊かな場所にあります。校区内にスパーやコンビニはありますが、その代わり、歴史的な建物や跡が多く、毎年十一月にはクイズを解きながら校区内を歩いて地域理解を深めるふるさとめぐりという行事もあります。子どもや保護者の方、地域の方々とのつながりを大切にしており、温かくアットホームな雰囲気のある学校です。教員になってから初めて訪れたところですが居心地がよく、私はここが好きになりました。関川小学校での教員生活を振り返ってみれば、一年目と二年目は毎日手探りで過ごしていたように思います。一日が過ぎるのが早

く、先輩教員の方々にアドバイスをもらいながらついていくことに必死でした。目の前の子どもたちと向き合う日々の中で、自分自身の未熟さを痛感し、理想と現実のギャップに押しつぶされそうになったこともありましたが、手探りの日々だったからこそ子どもたちと一緒に成長しているという実感がありました。周りの先生方はいつも私を気に掛けて助けてくださり、一人で抱え込まずに相談することの大切さを学びました。先輩教員の方々の仕事を間近で見学し、ここで教員としての基本的な資質・能力を養うことができたことをとてもありがたく思っています。

関川小学校での教員生活にもやっと慣れてきたかと思つた三年目に、一年生を担当させていただくことになりました。私もいつか一年生を担当してみたいなあ、学習だけでなく学校生活のことを一から教えるってどんな感じなのだろうかと、私にもできるだろうかなんてことをぼんやりと考えていた矢先のことでした。入学前、就学時検診のときに子どもたちには一度会っていました。まさか自分が担任をするなんて思ってもいなかったもので、一人一人のことを詳しくは覚えていませんでしたが、近くにいるときに笑顔で話をしてくれた子がいたり、小学校が不安で泣いていた子がいたりしたことなどを思い出しました。

四月の入学式、一年生は十三人と少人数でした。ビカビカの制服に身を包み「今日から小学生だ。」「この人が学校の先生か。」というようにキラキラした目で私のことを見つめる子どもたちに私は戸惑っていました。子どもたちにどのように接したらよいのか、一年生にも伝わるように話すにはどうしたらよいのか、自分の子どもが初めて入学するという保護者の方に何と声を掛けたらよいのかなど様々な不安が頭に浮かびました。一年生の担任をすることに今までは違う緊張と責任を感じていました。しかし、初めての一年生に戸惑っているのは子どもたちも保護者の方も同じです。担任として信頼してもらえよう、分からないことは周りの先生方に事前相談や確認をして、もし困ったことが起きても落ち着いて対応しようと思ひました。一年目も二年目も手探りで、周りに相談しながらやってきた私には、三年目も自分一人で抱え込まずに周りに相談しながら、子どもたちと一緒に成長していきたいという思いがありました。責任を感じつつも、自分ができることを一生懸命やろうという気持ちでいっぱいでした。



そして、どの子にも「学校って楽しい。」と思ってもらうことを一年間の目標に決めました。そのために、どうしたらよいか考えました。例えば、教室だけでなく、校庭へ出て学習することもありました。九月、国語科で「いちねんせい」のうた、あおいそらのこくばんに、なにかこう、うでをのびしちからをこめて、まっすぐ、いちねんせいの一」という詩を学習していたときです。まず、これまでの学習と同じように教室で音読し、全員で暗唱できるようにになりました。そこで、「外へ出て、空に向かって言ってみよう！」と呼び掛けました。みんなは「えー！」と驚きながらも嬉しそうにして、元気よく外へ出ました。詩の言葉に合せて自分の腕を伸ばし、漢字の一を書く動きもつけて大きな声で暗唱していました。教室ではないところで国語科の学習をするなんて、この子たちにとっては初めての経験です。笑顔で暗唱する子どもたちを見て、「面白い。楽しい。」と思ってもらえたように感じました。

一年間はあつという間で、三学期も終わり、修了式の日がきました。その日、保護者の方から「たくさんさんの御指導、心から御礼申し上げます。」という内容の手紙をいただきました。また、「来年も先生がいい。」と言ってくれる子どもたちもいました。そう言ってもらえることはとてもありがたいし、これまでの苦労が報われるような気がしました。

四年目の現在は、持ち上がりで二年生の担任をしています。単級です。持ち上がりで担任をすることはほほえないと思っていたので、嬉しくて驚きました。環境があまり変わらないので、どうやったら去年とは違う、でも素敵な一年間になるかを考えながら引き締めて学級経営をしています。子どもたちはみんなすつかり小学校に慣れました。身も心も少しずつ成長し、顔つきが変わってきていることを嬉しく思います。一年生のときに一緒に学習した内容を忘れていないと、きに私が笑いながら「もう！一年生のときの先生は誰よ！」なんて言うとき、子どもたちは「佳奈穂先生です。」と返されます。こういうやり取りをして子どもたちと笑い合えるのも二年連続担任の特権かなと思います。

「教員にとっては何年間という教員生活の中の一つの一年間かもしれないが、その子にとってその学年は一回しかない。六年間の大切な小学校生活の一年間を担任しているということを忘れないように。」私が教員を続けるにあたって、いつまでも覚えておきたいと思っている言葉です。この言葉を思い出したとき、今まで担任してきた子どもたちに感謝の気持ちでいっぱいになります。そして、これから担任する子どもたちにも変わらず誠実に関わろうという気持ちになります。

今年度もあと少しですが、この一年間も子どもたちにとってかけがえのない一年間だということを忘れず、最後まで頑張りたいと思います。



共に成長する



松前町

松前中教諭
河野 夏美
(令二卒)

今年度、教師として二年目を迎えました。私は幼い頃から教職に憧れを持ち、絶対に教師になると強い意思を持っていました。しかし、大学入学後は幾度も私なんかで教師になってもよいのか、向いていないのかと不安を感じていました。特に、三、四回生での教育実習では、実習を終える度に楽しかったと思う気持ちと同じくらい不安が大きくなりました。そんな私は迷いながらも教員採用試験を受験し、晴れて夢を叶え、昨年からは教師として働き始めました。

教師としての一年目はあつという間に過ぎ去りました。四月、初めての環境に慣れることができたか、赴任時から緊張していたことを覚えていきます。一年生を担当することになり、すぐに入学式が始まり、生徒以上に緊張していたと思います。そのまま新学期が始まるかと思いきや、新型コロナウイルス感染症の影響で、生徒と二回目に会うことができたのは入学式からおおよそ二ヶ月後になりました。久しぶりに再会する生徒たちは目をキラキラと輝かせながら、友人と過ごす時間を楽しんでいた。これまで経験したことのない少し変わった学校生活が始まりましたが、生徒と共に順応しながら、毎日楽しい日々を過ごしました。しかし、やはり楽しいことだけではなく、教師になると大変なこともありました。私は子どもが好きで、様々な悩みを抱える生徒の話を聞いて、解決へとつなげていきたいと働き始める前はそう夢見ていました。実際は、生徒の問題は多岐に渡り、私なら悩まないと思う内容も多々あり、いかに自分が何も考えずに生きてきたのかと考えさせられることが多かったのです。生徒の心の繊細さや言葉の重みを強く感じるようになりました。これがきっかけとなり、一年を通して生徒にどんなことを伝えられるのだろうか日々考え始めました。

私の信念として、「自分がいいと思ったこと、やりたいと思ったことはとにかくやってみる。」という思いがあります。そこには、他者を思いやることが前提としてあるので、行動に移す前に思慮することが大切だという思いも込められています。この思いについて言葉を変えながら、事あるごとに生徒に伝え、どんな前向きにいろいろなことに挑戦することを勧めました。この言葉が生徒にどれくらい伝わったのかは分かりませんが、「先生、こんなことをやってみたいんですけど、どうですか?」と伝えてくれる子が増え、前向きに挑戦する姿勢が見えた気がします。学級のために、級友のために行動することができるよう生徒が増えたことは、私にとって非常に嬉しい経験となりました。

二年目は一年目と比べて、ゆつたりと時間が流れているように感じています。今年度も一年生を受け持つことになりました。今年の一年生は、昨年の生徒に比べると

全体的に元気がよく、積極的に行動をする生徒が多いように思います。学年によって色が違うことを初めて気付くきっかけになりました。今年もコロナ禍ということですが、昨年同様に制限を強いられることもありましたが、順調に子どもたちと学校生活を送っています。昨年と今年で一番大きな変化になったのは、部活動の顧問と生徒会担当になったことです。昨年は女子ソフトテニス部の顧問で、経験のないソフトテニスでしたが、子どもたちと一緒にプレーを行い、指導というよりは共に学んでいたように思います。今年は、念願の柔道部の顧問になりました。顧問をするのであれば、自分の経験のあるスポーツを指導してみたいと思いついたからです。しかし、指導する立場になってみると、自分の考えの甘さに気が付きました。私は自分の経験を物差しとして考えてしまう部分が多く、柔道の技に関しては目で見て真似て、練習を繰り返して体得することが普通だと考えていました。しかし、子どもたちの動きを見ると、それが難しい子もいることに初めて気付きました。動きを観察して学ぶことが苦手なときにどのような指導すればよいのか手探り状態でしたが、コーチの指導を基に動きの「コマ」コマを切り取りながら言葉添えて、理解を促していくことが必要なのかもしれないと感じました。子どもたちが何かでできないと感じたときには、なぜできないのか原因を追究することも大切ですが、最初のうちに私自身がどれだけポイントを絞って分かってやすい言葉で説明できているかが重要であり、今後の課題となると思っています。これからは部活

動の指導をするにあたり、子どもたちと一緒に練習に交じって、学んでいきたいと思っています。教師生活二年目で、まさか生徒会を担当することになるとは思っていませんでした。そのため、四月の第一回の職員会の際に、資料を見た瞬間に驚きを隠せませんでした。一年目のときに、当時の生徒会担当の先生から、「生徒会の動きをよく見ておいた方がいいよ。」と教えていただいたのですが、ですが、一年目ということもあり、自分のことと学級のことで一杯に思っていた私には周りを見れば、余裕もなく、生徒会の動きには最後まで無関心だった。だからこそ、今年担当になったときにひどく後悔しました。昨年言われた通りにどのように動くのかを見ていれば、もっと意欲的に生徒会の仕事を担当できたのではないかと考えています。一学期には生徒総会がありましたが、私は何をどうすればよいのか分からず、他の生徒会担当の先生に任せっきりになってしまいました。二学期には運動会や文化祭など大きな行事が立て続けにあることを知っていたので、挽回しなければという思いがありました。挽回する手立てとして、同じ生徒会を担当する先輩の先生に、次に何をしておけばよいかをどんどん聞くことから始めました。少しずつですが、自分ができるように動けばよいかが分かるようになり、自分ができることはどんどんやっていこうと前向きに仕事に取り組むことができるようになりました。現在は運動会や文化祭が終わり、生徒会としての大きな行事は終わったように思いますが、毎月の生徒朝会や生徒協議会などまだまだ気は抜けません。

一つ一つの仕事に丁寧に取り組み、今回生徒会を担当できたことを貴重な経験として捉え、来年度以降にも活かしていきたいと思っています。

教師生活二年目ということですが、まだまだ経験は浅いですが、子どもたちの成長を感じることが教師としての最大の喜びだと感じています。昨年担任した子どもたちは、すっかり先輩の顔となり、一年生を引っ張ってくれる大きな存在になっていてと思っています。今、担任している子どもたちも入学してきた四月の頃に比べ大きく成長しています。自分のことをしっかりと見つめて個性を活かしたり、他者を思いやりて手を差し伸べたりと一人一人が頑張る姿をたくさん見えています。私は、日々子どもたちの成長を見守りながらも、自分自身も一緒に成長し続けたいと考えています。そのためにも、日々の子どもの様子や先輩の先生方から多くのことを学び吸収し、自分の成長へとつなげていきたいと思っています。



出会いに感謝



大洲市
喜多小教諭
土居 恵
(平七卒)

四国カルストの大野ヶ原つて、気持ちのいいところですね。夏には平地より十度くらい涼しく、牛乳やアイス、大根はもちろんおいしくて、車で走るのも、最高。でも、二十一年前の三月、主人が大野ヶ原小学校に異動になったとき、観光気分は吹っ飛びました。生後間もない赤ん坊がいたので。病院や日用品が揃う店まで二時間かかるし、「日中は母子で何するの？」などのすったもんだを少々繰り返した後、流れて大野ヶ原の教員住宅に住むことになりました。というのも、何度か大野ヶ原に連泊したとき、地域の方々や大野ヶ原小学校の先生方がとても温かく歓迎してくれて、取り越し苦労で張りつめていた私の緊張は徐々に解けていったのです。

小学生が外で活動していたらそれとなく参加（校長先生の許可あり）。冬はスキーの授業が多かったのも、私たち母娘もいそいそとスキーウェアに着替えてしれっと参加したり……。教員住宅に洗濯機がなかったのも、放課後は小学校で洗濯機を借りて洗濯。放課後は小学生が遊びに来てくれたり、みんなのお家を行ったり来たり。お母さん方と色々な話をしたり、教員住宅の先生方や保護者宅で持ち寄りパーティー、宴になったり……。地域の方には心からもてなしていただいて、本当によくしてもらいました。

大野ヶ原小学校の運動会は、地域の運動会と合同で、ストローでビールを飲む競技（大人）など楽しい種目がありました。私はウーマンアームレスリングでうっかり勝ち進んで、地元のアラ還女性と決勝戦になったのですが、手を組んだ瞬間に「次元が違う」と悟りました。現役の畜産家で、何十年も連覇という方でした。もちろん瞬殺されました。

保護者の親の世代は大野ヶ原の開墾一世でした。開墾当時の大野ヶ原小学校の文集「ゆきんこ」には、保護者の文も載っていました。「大きくなったらお金をいっぱいとお父さんとお母さんに楽させてあげたい。」厳しい暮らしの中で親を気遣う文面に胸が

熱くなりました。開墾には重機も使えなかったと聞きました。重機の使えない開墾に家族でどれほどの苦労があったでしょうか。温かく迎え入れてくださる懐の深さの奥には、厳しい現実を生き抜いてこられた苦労があると知り、一層ありがたさを感じました。

十月から三月までは雪です。とにかく雪です。それはそれは積ります。校庭の吹き溜まりは二メートル以上、つらは一メートル。昼夜問わずマイナス十八度になるので、冷蔵庫に入れないものは凍ります。夜中にタイマーで切れたファンヒーターを付け直さないと低温になりすぎて睡眠ができません。車の運転では雪で道幅が分からず「落ちた」と思ったことが何回もありました。

お呼ばれた宴の後、娘を抱っこして腰まで積もったパウダースノーをサラサラとかき分けながら教員住宅に帰りました。月が雪原に反射して、どこまでも広がる夜の雪景色。また、冷え込む昼間の



ダイヤモンドダストは圧巻で、一生忘れられません。私が一番好きだったのは、雪のロールケーキです。雪原で風が斜面の雪を転がして、巻き込んでロール状になる現象です。正式名称「雪まくり」。道路のそこかしこにコロロンとかわいらしく転がっていて、初めは不思議でたまりませんでした。

大野ヶ原二年目の冬、校長先生がなぜか私に「あの、三年目、かまん？」というので、三年目に突入（普通二年）。そして、最初の薄っぺらな観光地の認識は当然大きく変わっていました。最後の一月は、引越しの荷物を車に積み、通い入れた大規模林道を下りながら、ありがたさと寂しさの涙で前が見えなくなって困りました。遠いし、不便だし、小さい子を連れてずっと気が抜けない大野ヶ原が、数えきれないほどの大切な思い出や風景のたくさんある、まるで故郷のようになっていたのです。

後から聞いた話ですが、主人は大野ヶ原へ呼んでくれた校長先生は、「あれ？ごめん、独身と思っちゃった」ということでした。……え。そういえば他の先生みんな独身。つまりすべてはご縁ということですね。

そしてその後、数々のありがたい経験を経て、私は現在、喜多小学校に勤務しています。



五百数十人の小学校です。大野ヶ原とは規模も歴史も環境も全く違います。でも、共通して言えることは、前を向いて覚悟を決めれば、素敵な毎日になるということです。そして、縁あって出会い、関わりあう相手の人生にとって、自分はんのチョイ役であるかもしれない。ですが、また一緒に笑おうや、と思ってもらえる人になること。それが大野ヶ原への恩返しだと思っています。もちろん、縁あって担任になった子どもたちとも素敵な毎日を送っている……日も結構あります。

そんな私の今の目標は、ドタバタと時間や仕事に追われているときに、先ほどの「ご縁・ご恩・覚悟」を思い出すことです。そして、少しでも子どもたちや先生方、地域の方々に貢献できるよう、日々精進していきたいと思います。

今の自分にできること



西予市
野村小教諭
桑谷 大介
(令三卒)

「ミルクとシルクのまち」と呼ばれる野村町は、乳川上流に位置する盆地であるため、霧が発生しやすい地域です。行く先を隠すように町を覆う幻想的な朝霧に、どこか知らない道に迷い込んだような、そんな不思議な感覚を覚えます。ミルクは白く、シルクも白い、その上朝霧に覆われて町も白い。どこまでも白い町だなあと霧がかかる朝をまたも迎えた今日この頃、ほんやりと思っています。そんな深い朝霧に包まれて、野村小学校の一日は始まります。

私が教員を目指したのは、今考えてみると、友達と毎日のように遊べる学校が自分にとって心から楽しいと思えるところであり、自分の居場所だという意識が強かったからではないかと感じています。小学校、中学校、高校と多くの先生方と出会い、いつの間にか教員という職業を身近に感じました。そして教員への憧れと自立したいという思いを抱き、ふるさとを離れ、愛媛大学教育学部に入學しました。

まだ、教員になって半年間の経験しかありませんが、今回いただいた貴重な機会にこれまでの半年間を振り返ってみたいと思います。配属校が知らされた三月末、卒

業研究のテーマが四国西予ジオパークであったこともあり、西予市には学生時代何度か訪れたことがありました。そのため、初任校が野村小だと知ったときには、驚きと同時に不思議な縁を感じました。引越しが終わったのが三月三十一日です。荷解きをする暇なく、翌日四月一日から人生初の仕事が始まりました。生活環境の変化で余裕がないままのスタートとなりましたが、頼りない自分にも先輩の先生方は温かく接してくださり、心から安心したのを覚えていてます。初めての職員会議で自分が二年生の担任であることを知り、新任式を経て、学級開きの時間となりました。どの先生から最初が大事ということを知っていたので、しっかりと心構えをして臨みました。

一学期は目の前の仕事の何が分からないのか分からないような状態であり、たくさんの先生方から多大なサポートを受けて何とか乗り切った、そんな四か月間でした。また、今の自分にできる仕事の少なさを痛感し、子どもたちから「先生」と呼ばれることに対して嫌悪感を抱いた学期でもありました。そんな自分が、一学期に唯一できたと思っているのが叱ることでした。本気で叱る、本気でぶつかるようになってから、少しずつクラスが落ち着いていったように感じます。今まで人を叱るという経験はありませんでしたが、自分自身これまで叱られてきた経験が数多くあったため、叱るという引き出しは自然と持っていたようです。真剣に叱ってくれる存在、自分と本気で向き合ってくれる大人がいたからこそ、今の自分がいるということを実感し、自分がとても恵まれていたことに気付くことができたのです。

二学期に入ると、校内は運動会ムード一色になりました。教員の立場で参加する初めての運動会で、普段とは違う校時や校庭から聞こえてくる音楽に、自分自身も子どもたちと同じようにワクワクしていました。しかし、そんな気持ちに浮かれる暇はなく、大きな行事に向けた準備は次から次へと舞い込みました。一学期以上に時間に余裕がない毎日、先輩の先生方についていくのに必死でしたが、混沌とした一学期を乗り切ったという自信から心には少しの余裕がありました。

運動会期間を通して、褒めることができるとするのはその子をよく見てということであると学ぶことができました。それは、他の先生方の指導を受けている子どもたちの様子をよく見ていると、一学期には見えていなかった良さに気付くことができたからです。普段はどうしても「ここを直したい」「もっとできるはず」という思いから、注意ばかりの指導になってしまいがちです。このままではいけないと考え、運動会期間中は子どもの持ついいところを探すことを心掛けて、見つけ次第どんどん褒めるように心がけました。褒められた子どもたちはもれなく照れくさそうな様子で、あまりに褒めすぎるので、なかには先生「今日で最後のの？」と言ってきた子もいたくらいでした。普段の自分がどれだけ褒めることができているのか改めて考えさせられ、深く反省しました。

教師になってから半年が経ち、教師としての喜びも感じるようになりました。それは子どもたちが思いを感じることができ、体調を崩して、保健室で休ませてもらったことがありました。体調管理ができていなかった自分への失望と、代わりに授業をしてくださった先生方や子どもたちへの申し訳なさを感じながら休んでいると、たくさんの児童が心配して訪ねてきてくれました。「先生がおらんとつまらん。」と言いな



が、大きなやりがいを感じています。長々と書きましたが、これはまだ教員として一年間通して働いたこともない自分が感じている全てだと思っています。悩み、苦しみ、失敗したとしても、自然と前を向けるのは能天気な若者の特権なのかもしれません。ある先生に「今日も朝霧が凄かったです。」と話した際に、「霧が出ていてってことは、いい天気になるってことだよ。霧の上は晴れているから。」と教えていただいたことがあります。教員生活一年目の自分には先のことは分かりませんが、日々の一歩一歩がほんやりとした視界を晴らしてくれると信じて、がむしゃらに進むしかないように感じます。今はただ、目の前の子どもたちと全力で向き合い、自分にできる精一杯を出し切りたいと思います。

「教育する」ということ



松野町
松野中教諭
林 惇
(平二九卒)

私は、大学卒業後、すぐに特別支援学校高等部に勤務した。最初は右も左も分からず、先生方から毎日様々な指導をいただきながら、学校に慣れるのに必死だった。二年目は同校中学部に移った。ようやく慣れてきてはいったものの、生徒が変われば、対応の仕方が全く違うことに悩み、苦労した。三年目は島しょ部の中学校に転動した。自分が望んでいた中学校というところで、胸が高鳴っていた。しかし、特別支援学校との違いに戸惑い、部活動指導など新たな校務に東奔西走し、またしても、光のように過ぎ去った一年になってしまった。その後、現在勤めている松野中学校に初任者として勤務することとなり、二年目になった。今年度は初めての学級担任をさせていだいてる。

教育に携わり早四年が過ぎたが、大学を卒業してから今まで、職場や居住地は変わったが、自分を取り巻く周囲の環境はさほど変わっていない。

学生時代に打ち込んだボート競技やトライアスロンには、選手や審判員として関わることもある。お世話になった人や旧友には、学生時代と変わらない話をし、後輩には指導をする。趣味のけん玉では、毎月行われるけん玉教室の運営

を行ない、けん玉協会の先輩方とともに、小学生に教える。また、ある時には、子ども食堂に顔を出しては、たわいもない話をする。子どもたちは成長が早い。たくさんの方ができるようになっていたり、背がぐんと伸びていたりする。その関わりの中で、時折「あの時の惇さんの指導でコッがつかめました。」「惇君、まだ銀河系一周(けん玉の技)できないの?」「もう今年小学校卒業だよ。惇君と初めて会った日が懐かしいわ。」などの会話をします。そのような会話の中で、子どもの成長を実感することがよくある。

ある就職支援サイトの社会人を対象とした調査によると、自分の人生に最も影響を与えた人物について、およそ十人に一人が「学生時代(小学校・中学校・高等学校)の先生」と回答している。つまり、教師は、一定の人の人生にかなりの影響を与えている。かくいう私も、私を担任して下さった先生方のおっしゃっていた考え方や学習の方法など、数多くの事柄を今でも覚えてる。

振り返ると、教職に就いてから、各学校や学部での一年という短い期間を、自分自身に余裕がない状態で教育に臨んでいた。その時の生徒には、たくさん時間を割いたり、気持ちを込めたりすることが十分にはできてなかったかもしれない。それは、学校での毎日の関わりや進路指導などを通して、子どもの今後の人生を左右するかもしれないということである。

前述のとおり、今私は初めての学級担任をさせていただいている。本校での勤務一年目には、初任者として多くの研修があり、なかなか生徒との時間が取れなかつ

た。今年度は、学級担任であるため、かなりの責任を感じているが、一方で今まで以上に生徒の健全育成への情熱は高まっている。生徒の学習習慣を定着させ、学力を向上させるためにはどうしたらよいか。担当教科では、より楽しく学びながら、生徒の力をより引き出すにはどうしたらよいか。学習に限らず、私生活の満足度を上げるためにはどうしたらよいか。将来を見据え、良い人生を送ることができるようにするための習慣形成は、どのようにしたらよいか。様々なことに日々頭を悩ませている。

私は、生徒が学習方法や人間関係などの悩みを抱えればまず話を聞くことに徹する。解決方法を提示する場合は、自分なりの考え方や行動の仕方を生徒に伝えるのも良いかもしれない。しかし、その際、個人の経験や考えのみに依存しないよう注意が必要である。世間一般ではどうか、本当に正しいのかなどの根拠もなく、軽はずみな話ではできなくて感じている。だから、情報を精査し、話す内容を選定する必要がある。生徒の将来に影響を与えるのならなおさらである。そこで私は、教育に関連する研究論文や、それに関する科学論文、様々な職種や社会情勢に関する本などをたくさん読むことにした。その中で、生徒にとってより効果があると考えられるものを工夫しながら、日々生徒に伝えるようにした。

私は、朝の会に瞑想を取り入れている。瞑想は、数多くの研究から、抑うつや不安の低減、集中力、発想力、共感能力、自己コントロール能力の向上などの効果が明らかになっている。Apple、Google、Yahoo!など、今ではその他数多

くの会社も取り入れるようになって、実際に生産性や創造性の向上、ストレスの軽減に効果があったと報告されている。現時点で、瞑想との因果関係は分らないが、一学期末の懇談会では、多くの家庭で学習に向かう姿勢が変わり、良くなったという話を聞くことができた。実際に、成績上位の生徒は、以前に比べ、何事にも落ち着いて行動しているように感じる。学期の目標では、より目標達成率が向上するKOPR(Keep On Pushing)プランニングを用いて計画を立てた。それにより目標達成率が上がった。目標達成に至らなかった生徒も、多くの生徒が計画を実行したり、習慣化するなど成果が見られた。

学習方法については、効果が高いと言われている方法を、月替わりで背面黒板に紹介し、根拠となる本を学級文庫として置いて入れている。その他、健康教育にも力を入れている。学級通信では、睡眠、食事、運動、メンタルと、テーマごとに定期的に揭示している。メタ分析やランダム化比較試験など、研究の中でもより正しいとされる結果から、健康に良い習慣を生徒が意識しやすい教室環境づくりをしている。生徒が、様々な困難を乗り越えられるよう、成功者と言われる人の人生の苦悩を話すこともある。また、私自身が勉強をしている姿を生徒に見せることによって、少しでも生徒の姿勢も変えられるのではないかと考え、調べたことをまとめたり、読んだ本を並べたりするなど、多方面から生徒にアプローチをしている。

けん玉教室や子ども食堂など、私が、普段の関わりの中で感じている子どもの成長は、友達のような関係であるため、良好な影響が

あるように感じる。しかし、教師としての立場は違う。授業をしたり、日常生活の指導をしたり、社会生活上の模範としての姿を示したりしなければならぬ。教師がなすこと全てを生徒は見ており、生徒は、教師や周囲の大人を見て育つ。現代社会の中心を担っているのは大人だが、未来を担うのは今の子どもたちである。私たち教師は、そのような未来人材に正しい知識を教える責務がある。



ピンチはチャンス



愛媛大学教育学部
附属小教諭
山本 大介
(平二四卒)

学校の先生になって早くも十年が過ぎようとしている。実は初任者の時にも、この同窓会報に執筆させていただいた。「もう十年が経ったのか」と時の流れの早さに驚いている。そして、今までのことが懐かしく思えてきた。そこで今回執筆させていただくにあたり、自分の教師生活について振り返っていきいたいと思う。

初任校は今治の立花中学校。知らない場所であり、合意もあらず、本当に分からないことばかりで、ピンチの連続であった。サッカー部の顧問として、生徒に混じって練習に参加したり、試合会場まで生徒と一緒に自転車で行ったりもした。顧問の先生がやることを見よう見まねで指導するものの、自分がすると上手くいかず、生徒もあまり聞いてくれない。力にはなれなかったものの、生徒たちと一つの目標に向かって頑張ることのやりがいを感じた。

授業では、三年生の受験生を相手に数学を担当した。他クラスの先生との授業力・生徒指導力の差を感じ、悩むこともあったが、その中でも、多くの先生が様々な面で丁寧に指導をしてくださったことは本当にありがたかった。

二年目はまさかの小学校への異動。しかも担当学年は二年生。中

学三年生との違いにかなり不安であった。子どもたちは元気いっぱいであつた。子どもたちは元気がいいかわいらしい反面、上手にコントロールすることができない。大きな声で怒る日々。何をしたいのか分からず苦しんだ。そんな様子を見かねて、先輩の先生方は、「あの先生の授業を見ておいで。」「先生は、背が高いんやから、大きな声を出さなくても立っているだけで大丈夫やけん。」など、私の現状をよりよくしようとアドバイスをしてくださった。それ以降、子どもへの関わりを改めたり、先輩の先生方の技術を盗んで自分なりにいろいろ実践してみたりすると、よい方向に向かっていった。子どもを押さえつけようとするのではなく、子どものことを大切にしたい指導が必要であることを強く考えさせられた。低学年の担任として子どもたちと関わることでできたことは、自分の教師生活の中でも大きな経験となった。

教師生活三年目からは体育主任をさせていただいた。体育主任への憧れはあつたものの、いざなってみると仕事の量に驚いた。学校全体のことを考えなければならぬ仕事が多く、クラスのことが後回しになる日々であった。運動会では、全校練習が印象に残っている。初めて、全校の前で指導をした時の緊張は今でも忘れない。全校練習が終わった後に「先生よかったよ。」と優しく声を掛けたり、「こちらの思いや意図を汲み取り、行動したりしてくださる先生の存在は本当にありがたかった。多くの支えの中ではあるが、大きな行事をやり終えた時の充実感は大きく、自分の自信となった。今治での八年間勤務を終え、現

在の勤務校である附属小学校へ異動してきた。新しい土地。そして新型コロナウイルスの影響もあり、「どうして自分なのか、どうしてコロナのこんな時に。」とマインナスばかり考えていた。ずっと働いてきた今治を離れる寂しさと環境の変化に大きな不安を抱いていた。

それまでの教師生活を振り返ってみると、生徒指導や課外活動の指導、雑務など日々の忙しさに追われ、教材研究を十分にできておらず、本来大切にすべきである授業を軽視していた自分がいた。本校で算数を研究教科として仕事をさせていただく中で、この二年間は、算数教育にしっかりと向き合うことができた。他県のオンライン研修会に参加したり、算数に関する本もたくさん読んだりして、他の先生方に追いつこうと必死に勉強してきた。附属小での研究協議では、改善すべき点については、正直に言っていただけ。

耳が痛くなるようなことも多くあり、自分の授業力のなさに落ち込むこともあるが、どれも貴重な意見であり、とてもありがたく感じている。まだまだ、未熟ではあるが、授業観を変えることができていないのではないと思う。教師がさせたいことをするのはなく、子どもの問いや思いを大切にしたい。授業を心掛けて、授業力を磨いていきたい。

また、教育実習生への指導も不安が大きく自分にとってピンチであった。学習指導案の書き方、子どもとの関わり方の指導、算数の授業についての講話など「自分がやっていいのだろうか。」と思うばかりであった。だが、実習生の

学ぶ姿勢はすばらしいものがあり、自分も負けてはいられないと刺激を受けた。また、実習生の考えた授業には、それぞれのアイデアがあり、自分自身の学びにもなった。そして、実習生から、教員採用試験の合格の報告を聞いた時には本当に嬉しく、未来の教師を育てるという使命にやりがいを感じた。

そして今年度は一年生の担任。果たして一年生を相手に一年間やりきることができるだろうかと思ふ不安ばかりであった。ランドセルを片付け、プリントの配り方、給食の配膳などなど、一から教えていくことがこんなにもあるのかと本当に驚いた。しかし、子どもたちは本当に純粋で、学ぶことを楽しんでるし、スポンジのようにたくさんのお話を吸収していく。だからこそ、毎日の授業を丁寧に、子どもがワクワクを感じられるものにしていきたいと思う。うまくいかないこともあるが、子どもたちと楽しみながら、お互いにレベルアップしていきたい。

自分の教師生活を振り返っていると、どの変化もどのピンチにおいてもあとから振り返ってみると自分にとっては大きなチャンスであり、大きな力になったのだと心の底から思える。また、それぞれの時に支えてくれた人々がいて、その存在は本当にありがたかった。あの変化やピンチがなければ、今見えているものも見えなかっただろう。今までに経験した自分にとってのピンチは、様々な立場からの見方を知ることができたり、授業観、指導観、人間としての価値観を変えることができたというものとなった。

そうは言っても変化やピンチはやっぱり怖い。見通しを持てれば、楽に感じられるし、何もなく平和に過ごしたいという思いもある。しかし、変化の多いこれからの世の中、変化に柔軟に対応し、ピンチをチャンスに変えていく心持ちが今より一層必要になってくるのではないだろうかと感じる。

初任者の頃の自分は十年後の自分の姿をどのようにイメージしていただろうか。中学校の教師であつた自分がまさか、小学一年生の先生をしているなんて夢にも思わなかっただろう。人生何が起るか分からない。さらに十年後の自分の姿はどうだろうか。また、たくさんピンチに出会っていくのだと思う。想像もつかないがともワクワクしている。

変化の激しい世の中で、その変化を楽しみながら自分の力に変えていきたい。これからやってくるであろう変化やピンチを、自分にとっての大きなチャンスと捉え、これからの教師生活を楽しんでいきたい。



学部トピックス



◆特別支援教育教員養成課程三回生の加藤史さんが令和三年度鳴門市成人式において市長賞を受賞しました

令和三年八月十五日(日)、教育部特別支援教育教員養成課程三年生の加藤史さんが令和三年度鳴門市成人式において「市長賞」を受賞しました。

徳島県鳴門市では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、対面形式の成人式は中止されましたが、恒例となっている「はたちの主張」作文の受賞者への表彰式等、一部が挙行されました。

加藤さんが受賞した「市長賞」は、「はたちの主張」作文において最高位の賞です。加藤さんは、自身が「聴覚障害児教育」を学んでいます。受賞作文では、自身の経験を通して、教育や支援に携わっていく将来の決意とこれまでの感謝が書かれています。

以下に受賞作文をご紹介します。

「共に歩んだ左耳」 加藤 史

「史ちゃんの前向きさで、私もシヨックから立ち直れたよ。ありがとう。」

様々な人からかけていただくこの言葉が、私を成長させてくれます。

私は、先天性の一側性難聴により、左耳の聴力がありません。一側性難聴とは、名前の通り、左右どちらかの耳がきこえない状態を指します。片方の耳は正常に聞こえているために、言語発達の遅れやコミュニケーションの困難がほとんど見られず、外見からは理解されづらい障害の一つです。実際に私も、難聴である左側から話しかけられて、それに気付かず無視をしてしまったり、遠くから名前を呼ばれた時にどこから声かしているのか判別できなかったり、そのたびに相手の反応を見るのが

怖いことがあります。しかし、「言わなければ伝わらないことがある」「自分のこと、一側性難聴のことをもっと知ってもらいたい」との思いから、自分のためにも周囲のためにも、難聴のことを必要に応じて伝えることの大切さ、そして、伝えることで得られる理解や共感があることを経験してきました。その、周囲の理解が、これまで学業や部活動に対して前向きに取り組むことができた原動力であったと、感じています。

高校二年生の時、おたふく風邪によって一側性難聴を患った方と出会いました。片耳がきこえないというハンディを持ちながらも、学業やスポーツ、人間関係、すべてにおいて前向きな私の姿を見て、先述の「立ち直れた。ありがとう。」という言葉をかけていただきました。力になったことがとても嬉しかったと同時に、一側性難聴を持って生まれた者だからこそ、様々な場面で「きこえない」を経験してきた当事者だからこそ、できることがあるのではないかと。そして、それを行動に移していくことが私の使命なのではないかと。強く、そう思うようになりました。

それから三年。はたちになった今、私は愛媛大学教育学部特別支援教育教員養成課程にて、聴覚障害児教育について専門的に勉強しています。

ています。

一側性難聴者として、同じ障害をもつ方とのコミュニケーションの機会をもつほか、聾学校を参観したり、ボランティア活動に参加したりして、聴覚障害児との関わりも積極的にを行っています。その中でも、難聴に対する捉え方が個々人で異なるため、前向きだけではいられず、悩むこともあります。そして、難聴の程度によって、コミュニケーション手段の獲得の方法や、教育の場を適切に選択し、ニーズに応じた支援を提供することが、きこえない子どもが「きこえないなりに」学力を身に付け、自分の道を自分で切り拓くことができるようにするために、必要なことだと実感しています。

きこえない子どもは、学校、

学級、そしてあなたのすぐ近くにいます。自分自身の「きこえない」経験を通しての適切な支援の提供や、自分の何事にも真つすぐな前向きさで、きこえない子ども、その親御さんの気持ちに、教育相談などを通して、さらに寄り添うことができるように、障害児教育について懸命に学び、ここ徳島で教員となり、子どもたち一人ひとりが抱えるニーズと向き合い、支援していきます。

最後に、将来の夢やたくさんの人たち、良い経験、苦い経験、そのすべてに出会わせてくれた、二十年間共に歩んできた、私のきこえない左耳。「きこえない」からこそ、感謝の声が詰まっています。本当にありがとうございます。



◆愛媛大学教育学部と四国中央市教育委員会との連携協力に関する覚書の調印式を行いました

令和三年十月二十二日(金)、愛媛大学教育学部にて、愛媛大学教育学部と四国中央市教育委員会との連携協力に関する覚書の調印式を行いました。

教育学部と四国中央市教育委員会は、新宮小・中学校をはじめ、四国中央市立小中学校の魅力ある学校づくりを推進するための交流を行ってきましたが、両者の関係を一層強化することで、教員養成・研修や教育実践、教育研究の充実・発展を図るために連携協力に関する覚書を締結しました。

当日は、四国中央市教育委員会の東誠教育長と小助川元太教育学部長が覚書を取り交わし、今後、両機関の連携をより一層強めていくことについて合意がなされました。

なお、教育学部はこれまで、愛媛県教育委員会を始め、松山市、今治市、松前町、伊予市、東温市、愛南町、内子町、西条市、上島町の教育委員会とそれぞれ連携協力の覚書を交わし、教育研究や教員研修等の学校支援活動を行うとともに、県内の学校現場における多様な実習等による教員養成を強化し、県内教育の質的向上による地域貢献を果たしています。



調印式の様子



小助川学部長と東教育長



集合写真

◆教育学部附属特別支援学校創立五十周年記念式典を開催しました

令和三年十一月二日(火)、教育学部附属特別支援学校体育館で、創立五十周年の記念式典を開催しました。

附属特別支援学校は、昭和四十七年四月に県下初の知的障がい者の養護学校として開校し五十周年を迎えました。この間、一貫して特別支援教育を志す教員養成の実習校、地域・大学と連携した研究実践校として、障がいのある子どもたちの教育の振興に努めてきました。

式典は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から規模を縮小しての開催となりましたが、来賓十人が出席し、附属特別支援学校の鴛原進校長の式辞に続き、仁科弘重学長、愛媛県教育委員会の藤田司特別支援教育課長、教育学部の小助川元太学部長が祝辞を述べました。

続いて、創立五十周年を記念して作成された動画「五十年のあゆみ」の鑑賞が行われ、開校から現在までの記録写真のスライドや第五十回記念大運動会の様子などが上映され、児童生徒代表によるお礼のことで閉会しました。

附属特別支援学校は、今までの五十年のあゆみを振り返り、感謝と誇りをもって、これからも障がいのある子どもたちの教育の振興に尽くして参ります。



鴛原校長による式辞



仁科学長による祝辞



愛媛県教育委員会の藤田特別支援教育課長による祝辞



小助川教育学部長による祝辞



児童生徒代表によるお礼の言葉



式典の様子

◆教育学部附属特別支援学校同窓会「虹の会」が 令和三年度「障害者の生涯学習支援活動」に係 る文部科学大臣表彰を受賞しました

教育学部附属特別支援学校同窓会「虹の会」が、令和三年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞しました。

この賞は、障害者の生涯を通じた多様な学習を支える活動を行う個人又は団体について、活動内容が他の模範と認められるものに対し、その功績をたたえ、文部科学大臣が表彰するものです。

虹の会は、四十五年にわたって、卒業生同士の交友を深め、社会生活に必要な知識・マナーの習得を図り、生活経験の拡大を図ることを目的として、毎月一回、テーブルマナー講座や地域の文化財散策、芸術体験・鑑賞、スポーツなどを行っており、これらの活動が高評価されました。例年、表彰式は文部科学省で行われていますが、今年度

は新型コロナウイルス感染症感染予防のため、ウェブ方式により令和三年十二月七日(火)に開催されました。並行して、附属特別支援学校の篤原進校長から虹の会の在間伸会長に表彰状が伝達され、列席者からもお祝いの言葉がありました。



在間会長と篤原校長



表彰を受ける在間会長



活動の様子
(大和ミュージアムでの地域散策)



活動の様子 (テーブルマナー)

◆教育学部でワークショップ「投票に行こう!」を開催しました

令和三年十二月十七日(金)、ワークショップ「投票に行こう!」を対面およびオンラインで開催しました。このワークショップは、明るい選挙推進事業の一環として、愛媛県選挙管理委員会と愛媛大学の共催事業で行われているもので、平成二十七年から教育学部が担当し、今回で七回目になります。今回は、大学院

教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)教科領域コース一年生の六人が授業計画から運営、当日の先生役も務め、主権者意識向上のための授業「世論と現代の政治」を実施し、教育学部生約四十人が参加しました。

受講生は、第四十九回衆議院議員総選挙投票・開票日の翌日であった十一月一日(月)の朝刊五紙の一面を比較して世論調査の仕組みや多様な意見の存在を確認し、政治的無関心の増大がもつ危険性について再認識しました。

愛媛県選挙管理委員会担当者からは、最近の投票率の状況や来年度実施予定の選挙などの説明がありました。最後に、愛媛県選挙管理委員会の森佑布書記長から「活発な意見交換がなされ、主権者教育

の推進者としての皆さん(未来の教師)に期待する」とのコメントをいただきました。教育学部の学生には、主権者教育を推進できる教師になることが求められています。教育を通じて、地域の課題を自分たちで考え解決していくことのできる人や地域の育成に寄与してまいります。教育学部では、今後もこのような連携により、学生の学びを支え、地域の人材育成の核となる質の高い教員養成に取り組んでまいります。



先生役の院生と受講生



愛媛県選挙管理委員会の説明



コメントを述べる愛媛県選挙管理委員会の森書記長

教育学部の今

◆学内風景

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、二年近く入学式、卒業式、大学祭等の行事や学内施設を使つてのイベント及び会議が自粛・縮小となり、今までとは全く違った大学生活となっていました。また、授業も対面授業からリモート授業と新しいシステムに変わり、学生の姿や笑い声で活気に溢れていた学内も日中人に会うことも珍しいような閑散とした学内になっていました。しかし、ワクチン接種が進むにつれ感染者も少なくなり学内にも学生の姿や明るい声が戻ってきています。



メイプル通りの様子



本来の姿に戻った駐輪場



アクア喫茶前で軽食を食べる学生たち



えみか前で談笑する学生たち



教育学部同窓会として準会員である在学生にどのような支援ができるかずっと検討してきましたが、教育玄関前付近を整備し環境を整えることで気持ち良く授業を受けてもらおうと三年前から同窓会花壇を作り管理しています。

◆同窓会花壇



◆ 在校生の声

人生の指針

初等教育コース小学校サブコース

善家 瑛徳



私の出身地は、「土居中^{どいなか}」という地名があるほど田舎である宇和島市三間町です。当然、松山市のことは全く知らず、一人で暮らしていくことへの不安がありました。が、これまで、とても充実した大学生生活を送ることができたと思います。その大学生活では、小中高と継続してきた剣道部での部長の経験や、友人と朝まで語り合ったり、焼き鳥屋や工事現場でアルバイトをしたりと今まで経験したことが無いことを経験することができました。この約四年間で、私はこれからの人生で大切にしていきたい指針が見つかったと思います。そのことについて以下の二点から述べていきます。

一点目は、「我以外皆我師也」ということです。所属していた剣道部では、一回生の秋に主将に就任しました。入学して半年、右も左も分からないままチームを牽引しなければならぬ不安と重圧は大きいもので、就任直後は、稽古内容等について先輩と衝突することもありました。また、三、四回生の時には、新型コロナウイルスの影響で約半年間の部活停止、二年連続で全国予選が中止になるなど目先の目標を全て失いました。このように大学での部活動は紆余曲折ありましたが、困難に面した時には、上下関係なく、部員達に相談することによって乗り越えました。先輩からの助言だけでなく、同期

や後輩からの助言が役に立ったことが多々あります。一方で、アルバイト先の店長や研究室の先生の助言が役に立ったこともあります。そのような経験を通して、自分以外のものはすべて私の師であるという考えを持つようになりました。今後必ずやるべきことから学ぶという姿勢を持つて生きていきたいと思っています。

二点目は、「出会いが出会いを呼ぶ」ということです。この四年間で私は沢山の方々に会いました。例えば、剣道部の同期や実習先の先生方、バイト先の常連客の皆さんなどがあげられるでしょうか。中学校の時、剣道の試合をしたことがあった、また、以前私と同じ高校に通っていた、時には私と同じ名前を持った方だったなど共通の出来事が関係していただきました。そのおかげでとても仲良くしてくださり、困った時に助けてくださいました。まさに、出会いが出会いを呼ぶとはこのことだろうと実感しました。その意味では、小学校一年生の時に私を剣道に誘ってくれた友人、小中高の恩師の先生方、今まで私に関わってく

ださった方々に感謝しなければならぬと強く思うようになりました。特に、家族には感謝しています。三間町という場所に生まれ、私を育ててくれたこと、「瑛徳」という名前をつけてくれたこと、仕事に打ち込み、私を進学させてくれたこと、すべてが両親と祖母に出会ったところから始まったと思います。私は、これから教員として働いていきます。沢山の先生方や子ども達、保護者の方々と関わることでしよう。これからの出会いをより良いものとするためにこれまでの出会いと今ある出会いを大切にしていきたいと思っています。

最後になりましたが、四年前、小さな田舎町を出た青年は、大学生活という準備期間を経て、眼前に広がる大海に出るための指針を得ることができたと思います。しかし、人生100年時代。まだまだ先は長いです。大学で得た学びと経験を無駄にすることなく、謙虚に人生を歩んでいきたいと思っています。

表紙によせて



宮田 武史

(昭四五卒)

「夢」

読書したり、人の話を聞いたりしていると、私の心を動かす言葉や文章や語句によく出会います。すると、私が趣味で行っている書で、その言葉や文章や、語句を表現してみたくなる時があります。

「夢」は皆に大事にされている言葉です。行書体で書いてみました。人間は大きな目標、即ち自分の夢に向かって努力するところに生き甲斐がある。私の好きな言葉があります。それは「夢叶うまで挑戦」です。故上甲正典氏(宇和島東高校・済美高校野球部監督)が常にこのことを語っておられました。

大学生活を振り返って

中等教育コース保健体育専攻四回生

古本 夏巳



私は、教員になりたいという夢を叶えることと、小学校から続けてきたバレーボールを大学でも続け、1部リーグで結果を出したことから愛媛大学教育学部学校教育教員養成課程中等保健体育専攻に進学することを決めました。愛媛大学では、一回生の時からふるさと実習や地域連携実習に、積極的に参加してきました。特に、愛媛県ならではの体験事業である「御五神島無人島体験事業」は、私の今までの人生の中で、もっともしんどく、その反面一番の思い出になる経験でした。一週間、小・中学生と、無人島でお風呂も、トイレもなくほぼ自給自足の生活を真夏の暑さの中で行

うのです。大の虫嫌いな私は、テントの中で足をはってくる虫たちに何度も「来るんじゃないかった。」と思われました。ですが、終わってみると、十日間一緒に不自由の中、協力して生活したおかげで班の中で家族のような絆が生まれ、このまま島でみんなと生活してもいいなと思うくらい、いい思い出を作ることができました。大学四年間を振り返ると、人との出会いに恵まれた四年間であつたと感じます。私の学担である日野先生は、「大学はエスカレーターに乗っていると思うんですね。エスカレーターでも上に登っていけるように動けるといいね。」という言葉を一、二回生のときに

よく言うていただきました。この言葉を真に受けて、たくさん遊んで、たくさん実習や部活動に参加して動き回った四年間だったと思います。元気なことが取り柄な私ですが、スケジュールをパンパンに入れすぎて、時には膀胱炎などの病気にかかってしまったのもいい思い出です(笑)。動き回ることによって、壁や問題に立ちはだかる時も多くりましたが、自ら動いて経験を大切にしていたからこそ、この四年間でたくさんの繋がりができました。教員試験などの試験と一緒に頑張る友人をはじめ、部活動で出会った仲間や無人島や実習などで知り合った先生方、そして近くで支えてくれた大学の先生方、愛媛大学にきたからこそできたつながりを大切にこれからも頑張っていきたいです。

近年では、新型コロナウイルスの影響で不要不急の外出の自粛が余儀なくされています。今までは当たり前のように行われていた大学の対面授業も、私が三回生の時からほとんど遠隔授業へと変わっていききました。対面授業や教員採用試験の対策も、絶えず自粛要請が出され、思うようにできないこともたくさんありました。しかし、新型コロナウイルスで制限がかかったからこそ、普段感じなかったことや経験しなかったことを学ぶ機会にもなりました。新型コロナウイルスの影響で、zoomの遠隔授業が始まったことにより、それを応用して、教員採用試験の対策を他大学の友人や先生方と行うこともできました。このような経験やつながりは、コロナウイルスがなければなかったものだと考え、とても貴重なものになったと思います。



先輩を偲ぶ



あしあと (6)

先輩たちのあしあと

(教育学部同窓会百周年記念誌より原文のまま抜粋)



山路校長と私

愛媛県師範学校

八木 繁一氏寄稿

(大正三年卒)



コニシキソウの多かった玄関前 (中央が筆者)

私は大正二年師範の四年生の時(旧制)剣道部の主将として選手五名と恒例の京都武徳殿の夏の仕合いに行きました。相手は大阪天王寺師範でした。その先鋒に我が方は副将まで完敗しました。私は、たいへんな責任を感じましたが運よくその先鋒を屠り、次々と主将までを一本も取らず完勝しました。さて九月の新学期に選手一同揃ってあの自垂の校長室の山路校

長先生にその戦績の報告に行きました。ようやくくれたと非常に喜ばれ私等五名に先生お手ずからお茶を汲んでいたゞきいろいろとねぎらいのお話をしていたゞきしました。私は卒業後間もなく余土の代用附属に任用され、二年後には本校博物館教室に転じ、ここで二十一年に余るお世話になりました。その間山路校長にも永年ごやかいになりましたが、ほめられたことは一度もありません。大正二年九月があととも先ともよい思い出となりました。

ある時の宴会に同僚の一人が、校長先生時にほめて下さると教育も仕事に精が出ますというようなことを申しましたら、校長さん、あののけぞったまま、オホン、怒られなんだからほめられたと思え、とお酌を要求して居られた一場面も今は思い出の一つです。

昨今、私は清水町の電停で電車に乗降していますがその線路にコニシキソウというタカトウダイ科

の小雑草が地面にくっついて生えているのをよく見かけます。この雑草が師範の大玄関前の庭に一面に生えて地面を覆っていました。もちろん植えたものではありませんが、可憐な野草です。校長先生は日頃それを大切にしていたので私も毎夕食後の学校園清掃には特に注意していました。ところがある日うつかりそれを鋏で削り取ったものですから、無趣味など大変しかられたものです。また、ある日の昼食時博物館教室前の鉢植の棚の所で給仕を呼んで居られました。給仕が出ていくと鉢植のクモの巣を取れの一語を残してもうそこには居られませんでした。二、三日後もそんなことがありました。三回目には私もとび出しました。クモの巣を取れとはクモを取れということだ、といわれてもうそこには居られませんが、私も気のつかぬ事だったと恥じ入りましたが、先生はこうして給仕に至るまでを正しく教育的に導かれたのです。自然を正しく育てる者こそ真の教育者の大切な資格だとお教え、まったく有難いことだったと思います。

さて先生は松山に過ぎたるものは道後の温泉・石手川堤防・梅津寺海水浴場と常に言って居られたものです。中でも石手川の散策はよくお供して植物のお話を致しました。その石手川も、梅津寺も、また道後温泉も昨今は先生の感じられたよさがどれだけ残っているでしょうか。ある教員の送別宴会の席で例によって私は先生のお酌をしていました。そこへその送別

教員がどうも長い間お世話になりましたとあいさつに來ました。しばらくして校長先生は「土百姓の子はだめじゃ」と大喝されました。私は驚きました。そしてお酌をと盃を私に差し出しているのです。私はお酌をして急いで私の席にもどりました。それは何でもその教員が教室で転任話を生徒に漏らしたのが校長先生の耳に入ったためらしかったのです。校長先生は部下教員に進退に関するような問題を事前に軽々しく口にしてはならぬとよく言われていました。

さて私は春の休みを利用して興居島の臨海実習に出かけました。島は当時桃の花盛りです。そこへ正門の脇田君が来て校長先生がお呼びだからとアイコの浜に伴われました。そこの一そうの小舟には校長先生・増野先生・小野先生等が同乗の友沢君のお世話で、花見酒の最中です。私もしばらくお相手をして宿に帰りました。そして翌日夕方帰宅して驚きました。「山地校長退官」の新聞ニュースです。昨日の今日です。私はその新聞を手にして持田のお宅へとび込みました。先生にお会いしてはいよいよ本当だったのかと初めて得心も行き、なおまたがっかりしました。その足で増野・小野、二人の門をたたきましたが、昨日の興居島まではぜんぜん知らなかったと肩を落として居られました。出所進退の鮮かさ正に古武士の感ありでしょう。

青年学校教員養成所生活の思い出

愛媛青年師範学校

岡田 利幸氏寄稿

(昭和一四年卒)

西条農校をおえ、住友化学の分析工として、日給一円で働いていたころ、もうすこし勉強したいと思っていた時、私の目に飛び込んできた新聞記事、それは、昭和一三年三月一五日の日支事変の戦況と、青年学校義務制、それにまつわる教員養成に関する事であった。それが私の生きる方向づけに大きな力となろうとは予想だにできなかった。

今まで教師になろうなど、一度も考えてもみなかった私、何かにとりつかれたように、願書の提出をすませ、松山へ、山越の学校を尋ねた。「あまりにも小さい」、これが学校かと驚いた。試験の結果入所を許可された二三名の中に私の名もあった。迷い続けて、意を決して入所、その中に三〇歳を越え軍隊生活をおえた人、妻帯者、教員をしていた人、私のように会社勤めをしていた者、旧制中等学校を卒業したばかりの若者等経験のちがった人ばかりだった。



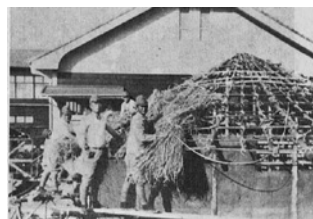
私の入所したころは、松山農学校から山越に独立して日も浅く、一部(二年制)各学

年二〇名(一部(一年制)二三名、計六三名全員が一部屋四〜六名に分かれての全寮生活で、しかも自給自足、文字通り晴耕雨読の生活であった。よほどしつかりしていないと自分自身が目的を失いそうで、これが教師になるための修業かと思うことが再三であった。

毎日の生活は、はん木の合図での行動で、飼育加工・栽培・開墾・軍事教練・朝夕の余暇を利用しての柔剣道・その他当番勤務・教育学・公民・一般教養に関する教科学習をした。かたわら、火曜日を除いた毎夜、神に祝詞を上げ、輪番で報徳要典の指導にあたったこと等はつらい思い出の一つである。

火曜日の夜は戦没者先輩のためにお経をあげ、二時間の座禅行をし、自己を深く省みた。「これでよいのか」としきりに迷った。また月一回暁天座禅のために禅寺に行き、座禅を組み、夜は平松師を招き、詩吟・和歌朗詠をした。その時がなんだか、ほっとする時であった。週三〜四時間の軍事教練の時間があつた、今の大学あたりの練兵場で、将来の予備役将校を夢に、汗を流して、はいまわった。

たのしいことは日曜日、友だちと大街道や湊町の方へ出かけて、食べることであった。また腹が空いてこまるので、こっそり寮を抜けだしてうどんを食べに出かけ、きまりを破るスリルをたのしんだ。教室がせまいので日輪兵舎造ったり、農業の神をまつる社作りをしたりした。もっともいやだと思つたのは、豚の餌集めに町へ出かけた、自分で作った、サクラ



草、シクラメン、乳酸飲料等を町へ売りに出かけ、うれなくて暗くなるまでリヤカーを引き、心の動揺をおさ

ながら足のいたくなるほど歩いたことである。

今でも松山にいき、大街道や湊町で花を売っている人に出合つた時、三七年前の苦しかったことが、今は懐かしいことの一つとして、昔を思い出す大きな力となつてい

る。先日護国神社に参拝し、万葉植物園をあとにしたとき、前を流れている小川を見て、その小川の流れには昔の面影はないが、この小川にそつて伊台の耕心農場に出かけ、山にいどみ汗を流したことが昨日のようになつてく、恩師の顔、友の顔が思い出され、いつの間にか養成所跡に立つていた。

立ち並ぶ仏のすがた今みれば
みな苦しみに耐えしみすがた

室長さんとおにぎり

愛媛大学教育学部

佐伯 弥生氏寄稿

(昭和二十七年卒)

「室長さん。」

「室長さん、あのねえ。」

寮の夕食が終わつて、そろそろ各部屋に灯のともるころ、お部屋の身中は活気づく。口々に、自分の身

の回りのできごとを聞いて貰おうと、声がだんだん弾んでくる。

「ええ、ええ、なあに。」

お習字の手を止めて、ひとりひとりにほほえみかけて下さる。調子づいて話に花が咲いたころ隣りの部屋から、忠告の伝令がとんでくることもたびたびだった。自習時間に入っているのも忘れてはしやぎ回つた。

私が三津の女子師範予科に入学したのは、終戦の翌年で、まだまだ食糧難の続く昭和二十一年の四月。生活難は覚悟の上の寮生活だったから、つらくなかった。むしろ、室長さんを囲んでの、いたわり合い、助け合いの生活は、家庭的で楽しく、勉強にも打ちこめた。

室長さんは、寮の炊事係長だったので、寮生の食事に気を配つておられ、同室の人たちもまた、炊事軍曹のつもりで、協力を忘れなかった。夕飯は、とうもろこしの団子入り雑炊だったが、ふかし芋だけの時もたびたびだった。夏休みには、寮生全員が胡瓜や南瓜の葉や茎を乾燥した。それを持ち寄つて乾パンと替えたこともあつた。農園での増産作業も、寮の大世帯はまかない切れなかったのだらう。

お塩がなくなると、室長さんの引率で、私たちは菜葉を抱えて海辺へ行つた。きれいな岩の上でもむのである。海水で塩を作る話は聞いていたが、海水でもみ洗いをして、漬け物を作るというアイディアに驚いた。寮の食事は次第にまぎなくなつた。そのころ、

「ク。」

「土曜日は、決まってお家へ帰られるのね。」

「予科一年生の方が、しんぼう強いね。」

私たちは得意になつて話していた。

でも、そうではなかった。同室のみんなにうれしいおにぎりを食べさせたいという思いやりからだった。上級生から、そう聞かされて、返す言葉がなかった。そういえば、室長さんは、日曜ごとに、大きくて、まっ白なおにぎりをご馳走して下さいました。

私は、次の土曜、家へとんで帰つて、両親に室長さんのことを話した。日曜日に、母は、室長さんに感謝の気持ちをこめて、お部屋の人たち一三人分のおにぎりをたくさん作つてくれた。食糧難の中で、母の米工面はたいへんだつただらう。

私は、リュックを背負つて家を出た。おにぎりの入つた重箱と洗濯物でいっぱいリュックの重さは肩に食い込んだ。重箱の角が背中当たつて痛いのを、がまんしながら歩いた。そのかつこうがどんなに見えたのだらうか。駐在所の前でお巡りさんに呼び止められた。

「そのリュックの中には、何が入つてる。」

「お弁当と洗濯物です。」

「ふん、そんな物、どこへ持つて行く。」

「師範学校の寮です。」

「え、本当に学生かな。」

このかわいらしい姿が、闇屋さんに見えたとは情けない。やつと校

章を見せることを思いつき、急いでリュックを下ろしてオーバーを脱いだ。校章のついた制服姿の私を見直すように、お巡りさんは恐縮しながら言われた。

「早うに校章をお見せよ、ごくりうさん。」

私は言いようがなく、黙礼しただけだった。疑い晴れて、また、闇屋さんのようなかつこうで四キロほどの道を急いだ。にが笑いしながら。父の着物で作つたセルのオーバーと、紺のモンペは、ご自慢のおしゃれ着だつたのに自信を失つてしまった。

でも、室長さんのおにぎりへのお礼ができた満足感で、この珍事件を恥ずかしいとは思わなかった。さわやかな思い出である。室長さんの思いのこもつた大きくて、まっ白だつたおにぎりの味がなつかしい。

もう三〇年も前のことである。



愛媛大学教育学部

会員の声



法然と親鸞

英訳「教行信証」—Mark L. Blum博士の序文の続き—



吉原 宏文

(昭四二卒)

私の「教行信証」の研究も佳境に入ってきたと思う。令和三年六月十三日は、私の七十九歳の誕生日であった。かくも高齢となった今、忍び寄る老化現象と闘いながらの日々である。しかし、教育学部同窓会役員の皆さまの御配慮により、安心して研究に打ち込めることは、感謝の言葉しかない。今後も、益々努力していく決意である。

さて、ニューヨーク州立大学教授Mark L. Blum博士の序文の続きを考察していきたい。

その前に今、親鸞の師匠である法然について触れておく必要があると思う。法然(一一三三—一二二二)は、美作(岡山県)の人で、押領使漆間時国の子で、幼名を勢至丸といった。九歳のとき、父は夜討に遭うが、遺誠によって仇討を断念。十三歳で比叡山に登り、皇円について出家。その後、西塔の黒谷に隠棲していた慈眼房叡空を訪ねて弟子となり、法然房源空と改名する。それから約二十五年間、叡空のもとで研鑽を積み、京都や南都(奈良)の学

僧達も訪ねた。四十三歳のとき、黒谷の経蔵で善導著「観無量寿経疏」散善義の「一心専念弥陀名号」の文により心眼を開き、「専修念仏」に帰した。まもなく、叡空を下り、東山吉水(大谷)において、あらゆる階層の人々に浄土念仏の教えを説き、感化を蒙る人々が激増した。また、大原で、浄土念仏に関する法論をなし、聞く者を感服させた(大原問答)。そして、建久九年、関白・九条兼実の請いにより、「選択本願念仏集」を著し、一宗を確立。しかし、元久一年、叡山の僧徒が蜂起して、座主に専修念仏の停止を訴えたため、「七箇条制誡」を草し、延暦寺へ送った。また、翌年には、南都の興福寺から、専修念仏の九失を挙げた奏状(興福寺奏状)が、朝廷に出された。そして、建永二年、法然の弟子の住蓮・安樂が、宮中の女官、鈴虫・松虫を出家させたため、天子の怒り(逆鱗)に触れ、二人は死刑に処せられた。

(「岩波仏教辞典」七二八頁)。

今日、平和と自由を謳歌できる我が日本を離れて、世界に眼を転ずるとき、ミャンマーの内戦、香港の政治的状況等、多くの厳しい現実のあることを知る。何世紀も昔、法然・親鸞の時代も、人間の本質は変わらない、と感じるのである。

さて、Blum博士の序文にもどろう。もし、法然と親鸞の挑戦が狭い範囲の人々―主として、二人の指導者と二人の直接の信奉者の集団―の観点を反映したにすぎないとするならば、我々は、疾々の昔に、法然と親鸞を忘れていたであろう。しかし、事実は、二人自身の時代でさえ、法然と親鸞は、あらゆる階層の信奉者、即ち、大臣・大名から農民・漁師まで、を魅了した。そして、もちろん、結局は、浄土仏教が、称名念仏を手段として、今日の日本で最大の組

織化された宗教形態になるまで生長することができた。日蓮の伝統を除いて、神道の行事においてさえ、念仏が現われている。つまり、念仏は、仏教のあらゆる宗派において実践される儀式形式になった。

法然の「選択集」は、高等教育を受け、関白(首相)にまで栄進した平信徒の九条兼実(一一四九—一二〇七)の要請で書かれた。その「選択集」のなかで、法然は、自分の見解を説明するために、過去の神聖なテキストの文句を注意深く引用しており、その文章は明快で手本とすべき価値がある。同時に、今日、「法然教義」として、我々が学習するうえで極めて説得力のある論理を展開している。従って、彼の弟子達も、その写しを欲しがった。しかし、その動向に厳しく反応する外的諸状況を察知していたので、そのテキストは、法然の生涯の間、

秘密にしておかれた。また、その複写には、法然の個人的承認が必要であった。全体を見廻して、当時の社会とそこに生きている庶民における根本問題の解決の最も有効な実践形式として、阿弥陀仏によつて念仏が選ばれた、というのが法然の主張であった。従つて、修行実践や他の信仰形式は、重要性において二次的なものであることが暗示された。念仏は、源信以前でも、日本仏教の天台や真言での瞑想的かつ儀式的実践の一形式であつた。しかし、その時、法然は、念仏は単なる一の実践ではなく真の実践であると明示する善導の解釈学的論法に忠実に従つた。彼は、称名念仏のなかに、他の全ての実践形態と区別する宗教的義務を見出した。なぜなら、念仏によつて、人々が如何にして、何時、浄土に行くのか、また、どのような型の浄土に生まれるのかに、直接影響を受けるからである。

法然の死の直後一二二二年、「選択集」が印刷された。その配布が広まると同時に論争の嵐が引き起こつた。そして、高弁（明恵上人）・貞慶（解脱上人）のような高名の僧侶が痛烈な反論を開始した。また、比叡山の僧侶達が一二二七年、更なる出版を阻止するために、印刷の版木に火をつけた。しかし、一二三九年、親鸞の京都への帰還の数年後に、新しい版木が刻まれた。そして、この版木から沢山の拓本が配布された。既に言及したように、親鸞の「教行信証」の最初の下書きは、一二二四年に始まつた。彼は、一二五〇年にかけて、忍耐強く書き続けた。それ故、我々は、その大半が、法然の思想が少なくとも京都と鎌倉で多くの知的かつ政治的論争の主題であつた時、それと連携して書かれたことを知る。従つて、「教行信証」は、法然と彼の思想を支持する、という親鸞の熱望によつて動機づけら

れた著作であることがわかる。「教行信証」の結びは、これを立証する。事実、法然の弟子達もまた、法然の念仏の教えに忠誠を誓つて著作した。前述したように、「選択集」と「教行信証」との文体論的類似性は、言語の選択が重要な一部をなす。即ち、法然と親鸞の両者は、二人の母語である日本語と、二人のどちらも話すことはできなかったが、東アジアを席巻する仏教・儒教・道教における論題の学術書に使われた世界語 (lingua franca) として学者達が好んだ中国語（漢文）で重要な著作を残した。ここで、その歴史的状况を十分に理解するために、主としてこの時点で、我々は日本語で書かれた仏教的小論と学術論文が出現してきているのを発見することは注目値する。しかし、親鸞の「教行信証」は、他の著作からの引用で充滿していて、その全てが中国語である

から、研究者にとつて議論するのに好都合であつた。まさに、親鸞が京の都の教育を受けた精鋭の監視に対抗する公共の文書を創作したいと念願したからである。「選択集」が、非公式に扇動されて完成した著作であるとはいえ、法然もまた最終的には、国家の彼の後援者を超えることを目指していたことは十分考えられる。一方、「教行信証」は、文の格調（文体）においていくぶん客観的である。というのも、私がここで主張したいのは、彼自身の信奉者達への攻撃を含んだ更なる弾圧に対抗して、「法然運動」（専修念仏）を守ることが、親鸞の動機の必然的結果であつた、ということである。その上に、また、「教行信証」は、彼自身の思索の重要な声明に対して彼の信奉者達からの要請に応ずるという法然の前例にならつて表現されているところに親鸞の選択がある。我々はそれ

を正しく「親鸞教義」と呼ぶべきである。それはまた、当時の彼の教育を受けた仏教徒の仲間と子孫の間で親鸞の人格を定義するためのテキストとして貢献してきたのである。

こうして、この偉大なる著作の翻訳家である大拙鈴木は、このような難解な著作を、全く異なる観点、即ち当時の歴史的背景から二十一世紀の初めの英語圏へという現在の背景に伝達するために、ここに連れ出すという容易ならざる事態に直面しているのである。

二〇二一年（令和三年）

七月二十三日（金）

東京オリンピック開会式の日



731-0135

広島市安佐南区長束
一丁目一八・五一五



松山や

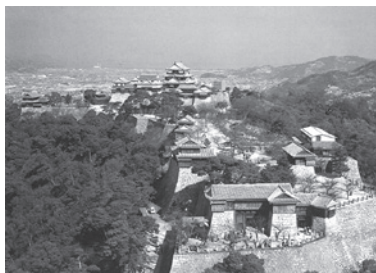


井手窪 理

(昭三七卒)



松山や秋より高き天主閣 子規
この句は明治三十五年（一八九二）
秋の作で、正岡子規「寒山落木」
秋の部にあります。子規はその随
筆「養病雑記」の中で、「世に故
郷程こひしきはあらず。花にも月
にも先づ思ひ出でらるゝは故郷な
り。——故郷近くなれば、城の天
主閣こそ先づ目をよるこばす種な
れ。」とその思い出をつづってい
ます。



松山城

あなたは、徳島大学の何学部で
したか。私は、愛媛大学教育学
部でした。昭和二十四年（一九四九）
旧練兵場跡に建設されました。そ
れに至る歴史を「愛媛県風土記」
（一九九一年 旺文社）を基に書
いてみます。松山城を築城し、城
下町を経営したのは、加藤嘉明で
す。嘉明は、徳川幕府より松山平
野の独立した丘陵勝山（一三三「メ」
の築城が許可されると、家臣の足
立重信を普請奉行に任命し、山城
と平城との長所を兼備した平山城
を建造する計画を立てました。ま
ず本丸・二ノ丸・三ノ丸の位置を
決定し、石塁の完成に全力を注ぎ
ました。城の石垣については石材
を廃城の湯築城・正木（松前）城
から運搬させました。特に正木城
からは、「おたた」と呼ぶ正木地
域の魚類の行商婦人が小砂を入れた
桶（御料櫃）を頭に載せ、か

いがいしく労役に従事したといわ
れています。また嘉明の夫人お万
の方は握り飯を配り、人々の労を
ねぎらったといえます。さらに山
の上に瓦を運ぶにあたって、足立
重信は近郷の農民を動員して三方
から人垣をつくらせ、手ぐり渡し
で一夜の間にその全部を運ばせた
ともいいます。

しかし、城郭は短期間に完成し
たわけではなく、櫓櫓や牆壁な
どは慶長九年（一六〇四）以後に
竣工したものが多く、二十余年後
の寛永四年（一六二七）ごろによ
うやく完了したのです。

城下町の整備については、旧城
下町の正木、かつてのこの地方の
中心地であった道後から市街の移
転を断行し、新城下の松前町に
は正木の住民を移し、唐人町には
朝鮮の役の捕虜を住まわせまし
た。また、城北山越（松山市）の
地には、天徳寺・竜穩寺・来迎
寺などを移し寺町をつくり、軍事
上の防備に利用しようと考え、ま
た堀の内には武家屋敷を設けて、
城西・城南・城東の三方面に商家
町を置く計画を推し進めました。

豊臣秀吉亡きあとは徳川氏に協
力し、元和元年（一六一五）の大
阪夏の陣には自ら参戦しました。
そして、ひたすら松山城郭の完成
と城下町の経営に努力を傾けまし

たが、寛永四年（一六二七）、藤
堂高虎の推挙により東北地方の重
鎮、陸奥国会津四〇万石に転封す
ることになりました。松山在城
二五年、正木城時代を含めて伊予
にあること実に三三年、松山城郭・
城下町・松山領の経営に努め、大
きな成果を上げました。

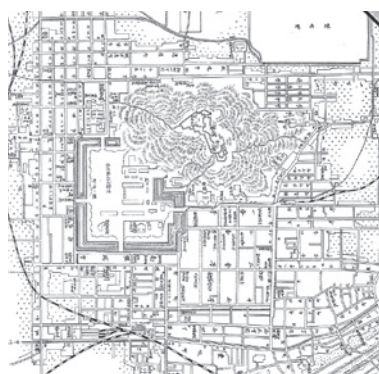
さて、明治時代になってからの
ことです。明治八年（一八七五）、四
国ではまず第5軍管広島鎮台の隷
下に丸亀歩兵第12連隊が誕生しま
した。西南の役を経て、その後も
軍備の強化が進められ、同一七年
に松山歩兵第22連隊の新設が本決
まりとなりました。まず一個大隊
が編成されて松山城跡に駐屯。同
二一年に三個大隊全部の編成を完
結しました。この連隊は愛媛・高
知両県を徴募区としました。

松山は累次の戦場となった中国
大陸に近く、海を隔てて本州・九
州の奥にあること、気候が温暖で

あること、歩兵連隊の所在地であ
ることなどから、捕虜の収容には
適地とされ、各戦役ごとにその施
設が設けられました。

日露戦争の時も、松山は最初の
ロシア兵捕虜収容所として令達さ
れ、同三七年三月に開所されまし
た。この時は、ハーグ陸戦条約（明
治三二年締結）によって処理しま
したが、これが同条約の世界最初
の適用例となったので、国際世論
を配慮して細心の注意がはられ
ました。当時、松山は捕虜収容所
の代名詞となり、戦線において「マ
ツヤマー」を連呼して投降してく
るロシア兵のあったことはよく知
られています。

ロシア兵捕虜は当初は、衛戍
病院・公会堂・勸善社・大林寺な
どに収容しましたが、その後人員
の増加に伴い、城北練兵場にバ
ラック病室を仮設し、主として傷
病兵を収容しました。

明治時代の松山
(明治44年松山市全図)

堀之内にあった歩兵第22連隊



城北練兵場バラック全景と松山城

各収容所では、22連隊留守隊が衛兵を配置して警戒に当たりましたが、外部での取り締まりは警察が担当しました。捕虜には一定地域内の散歩や道後温泉の入浴も許されました。同三十八年以降は民家居住も認められるようになり、捕虜は学校の運動会を参観したり、相撲や芝居を見物したり、景勝地を訪ねたりなどして郷愁を慰めました。

第一次世界大戦の時も、大正三年（一九一四）一月から松山には四一五人のドイツ兵捕虜が収容されました。

同六年（一九一七）四月、ドイツ兵捕虜は徳島県坂東（鳴門市）の新収容所に移送されました。この時、ドイツ兵との交流があり、日本で最初にベートーベンの交響曲「第九」が演奏されたそうです。

さて、昭和二〇年代です。本同

窓会報第一二五号に掲載された

「戦後二十年代の松山市雑感」小野植元幸氏（昭和二十九年卒業）の文章を基に書いてみます。昭和二〇年（一九四五）三月五日アメリカのB29が吉田浜海軍航空港に爆弾投下。死者七六人、行方不明三人。軽傷者一六九人。旧松山市内七月二六日夜爆撃、死者二五一人、行方不明八人。焼け残った建物は、県庁、日本銀行松山支店、地方裁判所くらいでした。勝山通りの右手、持田町あたりは家が残っていました。不思議なことに歩兵22連隊（現城山公園）はあまり被害を受けませんでした。

戦後復興の手はじめとして昭和二三年に松山博覧会がありました。第一会場は道後東グラウンド。第二会場は、現教育学部（元練兵場）の場所。ここでは縦横約二メートルの大型テレビを展示。映像は白黒、電波が乱れ、雨降りのように映り驚いたそうです。アメリカではすでにテレビが普及していたそうです。第三会場は小栗町ラジオ電波塔近くにあり、付近は田園風景だったそうです。

やがて、松山は第八回国民体育大会開場になるため急速に復興していきました。昭和二八年（一九五三）国体のため国旗が軒並みに立てられ旗の波でした。市

内には、タイガー劇場、オリオン座、銀映等一一映画館があり大盛況でした。しかし、一方、街角では戦時中負傷した傷痍軍人が、白衣に戦闘帽、松葉杖、胸に赤十字箱を持ち、助けを求めていました。あなたは、何年に入学されたのですか。私は、昭和三三年（一九五八）四月入学です。私の「学生日記」を見てみます。



学生日記

四月一七日（木）曇時々晴
入学式があった。その後、ガイダンスもあった。まだ、大学内のことがよくわからないので不安だった。

○授業 ○サークル活動 ○アルバイト
ともすると、自信がなくなつて消極的になりがちなので、明るく積極的に生活行動しよう。

四月一九日（土）晴

教育学部でガイダンスがあった。国語国文学研究会の先輩達が、歓迎会を開いてくれた。先輩達は大変愉快に、明るく生活しているようだった。

山岳部に入部したので、午後、御幸寺山へロッククライミングの練習に行った。みんな大変上手なので少々恥ずかしくなった。先輩達はみんな良い人だった。
四月二〇日（日）晴後曇
本年前期の履修科目を決めた。午後は、澤田君（同じ下宿の高校生）と有楽座へ映画を見に行った。「菩提樹」「崖」「ピカソ」の三本立てだった。大変よかった。

四月二一日（月）雨

あれだけあこがれていた大学に合格したのだ。この貴重な四年間を空費しないようにしたいものだ。この四年間考えようによつては、大変長いし、また、考えようによつては大変短い。が、とにかく貴重な期間だ。どう考えても貴重でないということはない。
かくして、私の大学生活は始まりました。先人たちが営営として生きてきた城下町。その一角の汗と涙のしみ込んだ練兵場の跡で。

教育学部の正門
(昭和35年頃)

なお、御幸寺山は、勝山の北にある山で、硬い安山岩が残って突出した山となった標高一六五メートルの山です。私は高校生時代に山岳部員と一緒に何度か登っています。私たちは「みきじさん」といっていました。

蜻蛉の御幸寺見下す日和哉 子規
〔散策集明治二八年九月〜十月〕
御宝町を出はずれると家一軒ない一面のたんぼ。北の方、トンボの群れ飛ぶ秋空の下に御幸寺山を眺めながら、子規らは稲田の中の道を東へ、散策の歩を進めるのでした。

〔参考資料〕

○「学生日記」

一九五八年 井手窪 理

○「子規と松山」

一九七二年 越智 二良

○「俳句の里 松山」

一九八一年 森 元四郎

○「愛媛県風土記」

松山市教育委員会

○「愛媛県風土記」

一九九一年 旺文社

○愛媛大学教育学部「同窓会報」

第一二五号 二〇一八年

〒791-3203 愛媛県伊予市中山町
出渕二一四五一

社会学のすすめ



教育学部名誉教授

堺 賢治



昭和五十年四月、愛媛大学教育学部に赴任した。結婚式を四月六日広島YMCAで行ったので新婚旅行はしていない。

愛媛大学の授業は体育社会学とハンドボールが中心であった。

研究は、東京教育大学体育学部大学院の修論のテーマが「スポーツの経済社会学的分析」である。教育学部に来たからには教育学部にふさわしい研究をしなければいけないと思ったのがいけなかった。一つの論文を書くのに三年間かかった。そのテーマが「生涯スポーツ試論―学校体育と社会体育

の統合を求めて―」である。これから研究内容が「地域スポーツ論」に変わってくる。

その頃、讃岐幸治先生の提案により、南本長穂先生と曲田清雄先生の四人の「地域」に関する共同研究が始まった。讃岐先生からはアイデア、南本先生からは研究の発展の仕方を選び、曲田先生からは調査票の作り方と大型コンピュータの入れ方を学んだ。

そして、日本体育学会に「地域スポーツによるコミュニティ形成」の研究を発表し続けた。また、教養部の藤原誠先生との共同研究

が始まった。

卒論の学生指導は厳しかったと思う。何しろ時代の最先端の研究を学生にさせるわけである。当時、私は広島大学の荒井貞光先生に心酔しており、その理論は「コートの中とコートの外理論」である。一口で言う「地域スポーツをした後は酒を飲むことが必要」ということである。夜研究室で卒論生全員が一つのチームになり、一人の卒論を全員で考える。研究室のストープにおでんを入れた鍋をのせ食べる。また、牛丼を三河家に買いに行かす。学生は私の授業よりもそちらの方をよく覚えていた。

私の研究のフィールドは、主に西予市（城川町・野村町・宇和町）が中心であった。当時、野村町で社会教育主事をしていた山本英明先生の協力で出来たのが鵜久森克先生の「城川町のコミュニティスポーツに関する研究」である。

運動部は赴任以来、ハンドボール部の顧問になり、「中四国学生ハンドボール選手権」で男子は六回優勝した。愛媛大学ハンドボール部を昭和四十一年に創部したのは一色光先生であった。女子ハン

ドボール部は、昭和六十一年濱部望先生が創部した。昭和六十三年京都国体に出場したのも懐かしい思い出です。その後、女子は一回優勝した。



第43回 国民体育大会秋季大会

社会学は問題解決学である。私
の研究スタイルは「過去↓未来↓
現在」の視点から考える。その結
果、南予ではいくらスポーツを盛
んにしても若者は都市に流出して
しまう。農村の経済的基盤を確立
しないと問題は解決しない。そし
て、研究が「コミュニティ形成
論」から「町おこし論」に変わっ
てくる。

これらの問題を解決するために
出現したのが「総合型地域スポー
ツクラブ（以下、総合型クラブ）」
である。平成十三年愛媛広域ス
ポーツセンター企画運営委員会の
会長になり、平成十八年二月、国
立大学で初めて愛媛大学総合型ク
ラブを設立した。

教育学部では、平成十一年に生
活健康課程スポーツ科ができ、保
健体育の学生数が百二十人になっ
たことが愛媛大学総合型クラブの
推進力となった。担当していた授
業は、理論…生涯スポーツ概論、

スポーツ社会学、総合型クラブ論、
スポーツイベント論。実技…ハン
ドボール、水泳、バドミントン、
小学校教材研究（ボール運動）で
ある。

平成二十六年三月愛媛大学を定
年退職し、久米校区に総合型クラ
ブを設立するため家を一軒借り
た。そのため「総合型クラブクラ
ブマネジャー」「生涯学習コーデ
イナー」「障がい者スポーツ指
導員」「ラジオ体操指導員」「シナ
プロジョー指導員」の資格を取っ
た。

ここ八年間は「晴耕雨読」の生
活です。内容は、経済学、経営
学、歴史、俳句、英会話、理科、
料理、園芸、音楽、健康、自転車
（四台）、トレーニングなどです。
サークルは「久米コース」に加
入しています。

一日の生活は、美木良介の「ロ
ングプレス」をし、六時半から浄
土寺で「ラジオ体操」、朝食、九

時から十七時までクラブハウスで
過ごし、夕方はクウ（柴犬）の散
歩、夕食と優雅な生活をしていま
す。また、今年の四月に久米総合
型クラブを設立する予定です。一
生指導者でありたいのが私の夢で
す。

堺賢治愛媛大学をやフーで検索
すれば私がわかります。



同窓会事務局からのお願い

今、事務局では後世に残せるよう教育学部（前身校含む）の
建物や行事等に関する古い写真を集め、データとして保存して
おります。皆さんのお手元のアルバムにある建物や行事等の写
真がありましたら事務局までご連絡ください。データ化した後、
原本はお返しいたします。

〈写真例〉



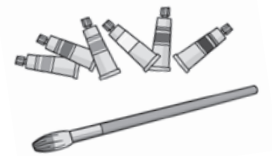
同窓会HPより



部活動紹介



愛媛大学美術部



えるためにも、感染予防策を万全に備えたうえで活動再開の準備を整えていきたいです。

〈愛媛音美の紹介〉

第六十七回目の中四国国立大学連合美術展覧会（音美展）は愛媛大学が中心となって活動しています。また、今回の愛媛音美の実行委員会会長は我が美術部部長が担当しています。今回の音美は情勢を鑑みオンライン開催となつていためインターネット環境さえあ

ればどこからでも参加者の作品をご覧になることが出来ます。興味のある方はぜひ特設サイトを検索してください。なお、特設サイトは二月中の公開を予定しております（十二月現在）。

最後になりますが、今後さらなる発展に向けて活動に励んでいく愛媛大学美術部に、これからもご支援・ご声援のほどを何卒よろしくお願い致します。

私たち愛媛大学美術部は令和三年度現在、大学院生五名、四回生十三名、三回生五名の計二十三名で構成されています。現部長が多忙なことから、コロナ禍で活動が制限されていたことから新入部員の獲得が出来ていない状況ですが、部の存続のためにも来年度までに新入部員を獲得したい所存です。

〈活動状況〉

現在は各々が自宅で個人制作をしている状況ですが、コロナ禍で活動が制限される以前は各々が自由に部室を利用して制作に励んでいました。当時は授業の空きコマに立ち寄ると何人か集まっております、授業のことや進路のこと、趣

味のことを話して交流していました。先輩後輩の交流ができる温かみのある時間だったため、また以前のような活動ができる情勢になることを待望しております。

また、コロナ以前は毎年前期が終わった直後に双海に合宿に行くのが慣例でした。部員同士の交流を目的とした行事であるためコロナ禍における実施の必要性はとて

も低く、今後も暫くは自粛の必要がありますが、この慣行を引き継いでいきたいです。
展示会やペインティングなどの学外ボランティア活動についても社会状況を鑑み、活動の機会を見合わせている状況ですが、学外ボランティア活動については幸いな



美術部の展示会（令和元年度11月撮影）

愛媛大学美術部

メールアドレス
artclub.ehimeuniv@gmail.com

twitter
@aidaibijutubu

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、二〇二二年四月入学生を募集中です。

〈募集期間〉

二〇二一年十一月二十六日(金)～
二〇二二年三月十五日(火)

放送大学はテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、司書教諭資格の取得が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。



放送大学
教養はエネルギーだ。
一科目からでも学べます
2022年度4月入学生募集中!
(2022年3月15日まで)
問合せ先 愛媛学習センター
TEL 089-923-8544
●インターネットで資料請求・出願できます。●資料請求専用フリーダイヤル
放送大学 www.cuj.ac.jp 0120-864-600

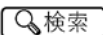


愛媛大学ミュージアムから



現在、愛媛大学ミュージアムは「愛媛大学ミュージアムの新型コロナウイルス感染症に対するBCP」によって異なる観覧方法としております。

来館される前に「愛媛大学ミュージアムのホームページ」、または「電話連絡」での確認をお願いします。

開館情報は インターネットで『愛媛大学ミュージアム／愛媛大学』 
または ☎089-927-8293 (平日 10:00～16:30)

～ 企画展示 案内～

『私たちの世界』 第二常設展示ゾーンで

～ 令和4年4月9日(土)まで

『文京遺跡の解明Ⅰ キャンパスに眠る弥生の大集落』 企画展示スペースで

令和4年2月14日(月) ～ 4月28日(木)まで

『菊川國夫 旧蔵コレクション展(1)』 第二常設展示ゾーンで

令和4年4月11日(月) ～ 7月30日(土)まで



愛媛大学校友会からのお知らせ

愛媛大学校友会

をご存じですか？



愛媛大学校友会はすべての学部垣根を越えて組織された団体で、同窓生をはじめ、学生及びその保護者、現職及び退職の教職員を会員として、平成16年に設立されました。

校友会は、①学生サークルへの援助 ②就職活動旅費の支援 ③留学渡航費の支援 ④学生図書への寄贈 ⑤入学生・卒業生への記念品贈呈 ⑥子規俳句カレンダーの作成 ⑦新社会人の歓迎会など、主に学生支援事業を行っています。

また、同窓生が主体となって組織された首都圏支部・近畿支部・中国支部では、講演会や懇親会を開催し、皆さんの参加をお待ちしています。

同窓生の皆さんは既に校友会員ですが、会員情報のご登録がないと大学の近況や校友会報の送付、校友会イベントのご案内が出来ません。是非、下記によりご登録いただき、校友会活動にご参加くださいますようお願いいたします。

EUAA

Chime University Alumni Association

〈愛媛大学校友会事務局〉 <http://koyu.ehime-u.jp/>

〒790-8577 松山市文京町3番 校友会館2F

Tel 089-927-8610 E-mail: office@koyu.ehime-u.jp

会報送付について

会報は、教育学部に関する行事や情報、また会員から送られてくる情報等を掲載し、毎年七月と二月の年二回発行しています。

皆さんにお届けする方法としては、県外在住の方は事務局からの直接郵送、愛媛県内在住の会員の方は、基本居住されている小学校区の担当者からお届けしています。しかし、希望があれば事務局からの直接送付も選べます。その際は左記の「送料納付」を参考にしてください。ただ、切り替えには、時間がかかる場合があります。その間、小学校区から事務局からの二冊届くこともあります。ご了承ください。

会報の送料納付について

会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替

振替口座番号

送り先 〇一六四〇一七一二七五四
七九〇一八五七七
松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

02		払込取扱票		通常払込料金 加入者負担	
016401712754	2754	金額	500	単位	円
愛媛大学教育学部同窓会					
☐ 同窓会懇親会会費 ☐ 会報送料 ☐ 寄付					
() 年 卒					
振替人 氏名 振替口座番号 振替日 振替金額 振替手数料 振替手数料引当金 振替手数料引当金引当金 振替人 氏名 振替口座番号 振替日 振替金額 振替手数料 振替手数料引当金 振替手数料引当金引当金					
振替人 氏名 振替口座番号 振替日 振替金額 振替手数料 振替手数料引当金 振替手数料引当金引当金					

振替用紙には、左記のように「懇親会会費」「会報送料」「寄付」と記載しています。送金の際には、該当の項目に✓をいれてください。なお、恐れ入りますが、卒業された年もご記入をお願いします。

用紙は同窓会懇親会が開催される年の二月発行の会報にチラシと一緒に皆さんでお届けしますが、必要な場合は郵送いたします。郵便局でも常備されていますが、前述の記載はしていない用紙になります。また、郵便局で記入して送る場合は赤色の振替用紙をお使いください。

敬 弔

(物故会員)



(死亡年月日)	(氏 名)
2・10・17	菅 公子 (昭21・愛師女)
2・12・26	露口 博臣 (昭32・愛大)
3・1・30	八塚美代子 (昭21・愛師女)
3・2・13	島津 通幸 (昭22・愛師)
3・3・26	堀本 昌子 (昭29・愛大)
3・4・6	今井 英親 (昭20・青師)
3・4・14	大政 武子 (昭37・愛大)
3・4・30	保手浜勝彦 (昭44・愛大)
3・5・9	兵頭 清見 (昭26・愛大)
3・5・17	戒田 保夫 (昭23・愛師)
3・5・24	藤堂 益夫 (昭23・愛師)
3・5・27	松木恵美子 (昭24・愛大研)
3・5・28	山内ハル江 (昭35・愛大)
3・5・31	石丸 保 (昭22・愛師)
3・6・13	宇都宮良文 (昭36・愛大)
3・6・18	久保 愛子 (昭30・愛大)
3・7・1	藤田キヌ子 (昭19・女青年)
3・7・4	関岡 千秋 (昭31・愛大)
3・7・22	西原 玲子 (昭29・愛大)
3・8・10	仙波貴美子 (昭19・女青年)
3・8・22	原 堆 (昭24・愛師研)
3・8・30	鴻上 信彦 (昭20・愛師)
3・9・1	白石 久松 (昭17・青年)
3・9・3	清水 光隆 (昭26・愛大)
3・9・9	篠崎 嘉一 (昭26・愛師)
3・9・16	近藤 理 (昭36・愛大)
3・9・21	田和 孝志 (昭29・愛大)
3・9・21	相原 秋男 (昭30・愛大)
3・9・27	渡部 仲次 (昭28・愛大)
3・10・21	芝 令香 (昭20・青師)
3・11・3	小笠原桂喜 (昭27・愛大)
3・11・14	菅 寛 (昭16・県師二)
3・11・19	宇都宮清馬 (昭19・青師)

寄 付 者 名

令和三年

七月〜十二月

井手窪 理 様
別 宮 達 也 様
岡 崎 萬太郎 様

※ 同窓会へのご寄付ありがとうございます
うぐいす

祝・叙 勲

(令和三年十一月三日)

秋の叙勲

☆瑞宝双光章

教育功勞

上甲 和博 殿



会員写真館



会員の皆さんが撮った写真を紹介するコーナーです。
それぞれの地域や会員の皆さんが何気なく撮った写
真を事務局にお送りください。
写真送付先：dosokai.ed.ehime@gmail.com

2020年6月に開館した「四国水族館」のクラゲの写真です。



あまりに幻想的なので思わずスマホに撮りました

写真提供：河野真知子（教育OB）



黒澤監督の「7人の侍」が脳裏をよぎりました。

写真提供：バーバラ郁子（昭和52年卒）

文芸欄

今回は「部活動紹介」コーナーで紹介した美術部員
大学院1年宮本諒人さんの作品を紹介します。



ドリトル先生、愛大に行く



メイヤーレモン



洋ナシとミカン